

## 教育委員会会議の概要（令和元年7月臨時会）

◆ 日 時 令和元年7月22日（火）午後2時から午後7時5分まで

◆ 場 所 仙台市役所本庁舎 第1委員会室

◆ 出 席 者

教 育 長	佐々木洋	出席
委員・教育長職務代理者	吉田利弘	出席
委 員	加藤道代	出席
委 員	花輪公雄	出席
委 員	中村尚子	出席
委 員	里村正治	出席
委 員	阿子島佳美	出席

◆ 会議の概要

1 開 会

2 議事録署名委員の指名 中村委員

3 協 議 事 項

（1）令和2年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書の採択について

（教育指導課長、教育センター担当指導主事 説明）

教 育 長 本日は18日に引き続き小学校の教科書について取り扱うこととし、保健・  
道徳・理科の3教科について協議を行うこととする。

このうち、理科については前回からの継続審議となる。また、特別支援学  
校、特別支援学級で使用する一般図書、文部科学省著作教科書についても協  
議を行う。

【保健】

教 育 長 それでは、初めに保健について協議を行う。

事務局から学習指導要領の目標等について説明をお願いします。

教育指導課長 担当指導主事をご説明する。

指 導 主 事 小学校保健について説明する。

小学校保健では、体育や保健の見方、考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に  
向け、学習課程を通して、心と体を一体として捉え、生涯に渡って心身の健康を保持・

増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成を目指している。

新しい学習指導要領では、保健領域において生涯に渡って健康を保持・増進する資質・能力を育成することができるよう、知識及び技能、思考力、判断力、表現力等、学びに向かう力、人間性等に対応した目標・内容に改善が図られた。具体的には、第3学年・第4学年では「健康な生活」及び「体の発育・発達」の知識と思考力、判断力、表現力等の指導内容を明確にするとともに、第5学年・第6学年では「心の健康」「けがの防止」の知識及び技能、「病気の予防」の知識とそれぞれの思考力、判断力、表現力等の指導内容が明確に示された。

なお、運動領域との関連を重視する視点から、「健康な生活」「体の発育・発達」「病気の予防」については、運動に関する内容を充実して示すこととされた。

協議会において取りまとめた小学校保健の全発行者の特長は、別紙資料2 報告の17ページにお示ししている。

主な特長については、まずA者は今日的な健康問題に対応した内容の資料が豊富に取り上げられており、各單元における資料が中学年から高学年への系統性を可視化し、学習内容を俯瞰できるよう工夫されているということである。

次にB者は、1単位時間の学習内容が見開き2ページで示されており、見通しを持って学習に取り組める教材配列になるように工夫されているということである。

次にC者は、お食い初めなど日本の伝統的な成長を祝う行事が取り上げられているとともに、異文化を理解し、視野を広げることにもできる内容となっているということである。

次にD者は、対話を通して学びの深まりを実感させるため、「学んだことを生かそう伝えよう」のコーナーが設定されているということである。

次にE者は、互いに考えたことを書いたり話したりする活動が示されており、言語活動が充実するように工夫されているということである。

教 育 長 ただいまの事務局の説明について、皆様方から何かご質問はないか。

里 村 委 員 新しい学習指導要領で保健については技能が加わったという理解でよろしいか。それから、その技能の例としてどんなことが考えられているのか伺いたい。

指 導 主 事 今回の学習指導要領では、第5学年・第6学年の目標において「健康で安全な生活を営むための技能を身に付けるようにする」と記されており、「心の健康」における不安や悩みへの対処の方法や、「けがの防止」において、けがなどの簡単な手当てに関わる技能を身に付けることを今回新たに示したものである。心の健康面では、腹式呼吸法によるリラックスや、体ほぐしの運動など、誰にでもすぐできるような活動が位置付けられている。

教 育 長 ほかにないか。

(質疑なし)

それでは、各発行者の教科書見本本に委員の皆様方からご意見をいただきたい。吉田委員から願います。

吉 田 委 員 最も身近な自身の体に関連する生活環境、とりわけ、ある意味身近過ぎるゆえに何気なく通り過ぎていくようなことに関心を持たせて、そして深く考えさせ、実践へと結び付けるために、各者それぞれに編集の工夫をしている印象を受けた。

A者は、テーマごとの基本が4～6ページで編集され、豊富な内容構成になっているが、イラスト、写真、活字のレイアウトが見て分かりやすい印象を受けた。そして、

子どもたちに見通しのある学習活動をさせるために、各段階において「考える」「説明する」「話し合う」「まとめる」などの保健的思考活動の充実と日常生活での実践に向けた編集がなされていると感じた。さらに、5年生の学習で、自身の発達と身の回りの環境の変化の中で抱える不安、悩みへの対処の在り方について、ページ数を割いて丁寧な編集を心掛けているという印象を受けた。

続いてB者は、内容によってはページ数を多くしているが、テーマごとに見開き2ページの編集を基本としており、簡潔に整理してあるというような特長がある。そして、全てのテーマにおいて課題把握、思考や調べる活動、まとめる活動の3段階を基本とし、子どもたちが見通しを持った学習活動ができるように編集されているという印象を受けた。また、発展的な学習コーナーを各学年2～3か所設け、子どもたちの保健に関する関心・理解を一層高めるような工夫がなされているという印象を受けた。さらに、これはA者と同じだが、5学年の学習の不安・悩みへの対処の在り方について、ページ数を割いて丁寧な編集を心掛けているという印象を受けた。

C者は、各テーマ2ページ編集を基本としており、1単位時間の取り扱いとしているのが特長である。また、構成が簡潔で見取りやすく、学年の区切りも明示されているというところもある。そして、話し合い活動で課題を把握させ、身の回りのチェック、調べ活動を通して、日常生活に活用させるというステップをテーマごとに設定し、見通しを持った学習活動が展開できるような編集内容になっている。また、発展学習のコーナーを各学年1か所ずつ設け、保健に関する学習を深める工夫がなされているという印象を受けた。

続いてD者は、各テーマ2ページ編集を基本としており、イラスト、写真、活字のレイアウトが見取りやすいという印象を受けた。そして、学習活動は振り返ることによる課題の把握から始まり、学習活動では内容により「調べる」「考える」「やってみる」「話し合う」等の活動が組み入れられ、そしてまとめの活動に結び付けているという編集内容になっている。このことにより、児童の主体的な学習を促そうとしている印象を受けた。また、発展学習のコーナーも、各学年2～3か所設けられている。

最後、E者である。各テーマ2～3ページを基本とし、内容によっては4ページで構成されているテーマもある。そして、学習活動も日常生活を振り返らせることにより、課題を把握させ、その内容によって話し合い、調べ学習、思考活動での課題解決の学習展開がパターン化された形で編集されているのが特長と感じた。さらに、発展的な学習として学年末や、一部単元末に学習内容と自己を関わらせて考えさせるコーナーが設定され、学習を一層進める工夫がなされているという印象を受けた。そして、5年生の学習の不安・悩みへの対処の在り方についても、ページ数を割いて丁寧な編集を心掛けているというような印象を受けた。

教 育 長 花輪委員、お願いします。

花 輪 委 員 まず、外形的な特長を申し上げる。判形だが、C者を除く4者がA4判、C者はA5判である。分量だが、平均90ページだがE者が86ページ、最多はA者で126ページと、40ページぐらいの差があるということである。

では、各者述べていく。

A者は、扉のページに「学ぶ意味」、目次が書いてある。続いて教科書の使い方の説明があり、各単元4つのステップで進めていくことを述べている。学習者がどのステップにいるかは、各単元内に明示されている。大変いい説明だと思う。各単元の最

初のページに、どのような道筋で目標に達成しているのかを明示していることも結構だと思う。各単元の終わりには「学習をふり返ろう」を設けており、定着を図っている。所々に学習を広げたり深めたりするのに役立つ資料が配されている。資料の数は比較的多く、3・4年生では12か所、5・6年生では23か所設けてあった。総ページ数が先ほど言ったように多い分だけ3年生から6年生まで五つの大単元の分量はほかの者よりも多い。特に5年生の大単元である「けがの防止」は、他の者よりも2倍のページ数を割いている。犯罪被害の防止や自然災害によるけがの防止にまで十分ページを扱っているということが特長である。様々な観点から、いろいろな情報を盛り込んだ教科書となっている。

続いてB者は、3・4年生、5・6年生、2つの教科書とも扉のページに「健康ってどんなこと」等を配して、保健を学ぶ意義を述べているのは大変結構だと思う。続いて、目次、学習の進め方の説明がある。本文中に学習者がどの段階にあるかを明示している。小単元のところには、「ここで学ぶこと」を明記しており、学習目標をつかみやすい構成となっている。他者と同様、困ったときの相談窓口、電話番号等を紹介しているが、地域の相談窓口の欄があるのは大変いいアイデアだと思った。「科学の目」の欄も設け、病原体などの写真などを掲載する工夫をしている。扱う素材が限定され、それらの配列のデザインがよく、文章の記載が簡潔、明確であるので、見やすく、読みやすく、理解しやすい教科書に仕上がっていると思う。

続いてC者は、大上段に構えた「保健の学び」の意義を書いているところはないが、扉のページには目次があり、単元のねらいが短文で示されている。また、もう一つ別の教科書の目次も示されていることは、学びの全体像がわかるようになっているのは良いことだと思う。学習の進め方は明記されていないが、「やってみよう」「話し合ってみよう」「調べてみよう」「活用して深めよう」の4段階の趣旨は本文中に明確になされている。このC者は巻末に資料を準備し、ところどころでそれらを活用しているのも特長である。内容を絞り、かつ簡潔な取扱いで、コンパクトに仕上げた教科書であると言える。

続いてD者は、2つの教科書とも扉の見開きのページに「わたしと健康」を設け、複数の有名アスリートからのメッセージを掲載している。保健を学ぶ重要性を喚起するにはいいアイデアではないか。さらに、その後ろのページに6コマ漫画で、学ぶ意義を示しているのも良いアイデアだと思う。学習の進め方も明記しており、教科書でなされている種々の内容が分かるようになっている。以上のように、教科書の最初のところで丁寧に学習の仕方が説明されているのは大変結構である。各単元は疑問文での問題提起、順序はいろいろ変わるが、「考えよう」「話し合おう」「調べよう」と進んでいく。これは画一的ではなく、単元の性質によって変えるという工夫を行っている。扱われている内容は過不足なく、記載の分量も標準的な教科書であると思う。やや1ページに素材を詰め込んでいる嫌いはあるが、配置、デザインが良いので、読みやすい教科書に仕上がっている。

続いてE者は、特に保健を学ぶ意義、学習の仕方などに言及する場所はなく、すぐ単元に入っている。その分、本文内で学習活動①②などと指示がなされている。学習活動の一つが「新しい自分にレベルアップ」という名称が付けられており、その活動が自分を高めていくよというメッセージを送っているのは大変いいことだと思う。5年生の最初の単元で「心の健康」であるが、LGBTが取り上げられているのは大変

よろしいと思う。ただ、「心の相談ダイヤル」の情報がなかったのは少し残念だった。同じく5年生の2で、自然災害のときの対応として「自助」「共助」（お互いに助け合う）、「公助」（行政が助ける）という概念を持ち出して議論しているのは大変好ましいものと思った。この者も、少ないページ数にやや情報を盛り込んでいるというように感じるが、本文自体は読みやすいデザインの教科書に仕上がっていると思う。

教 育 長 阿子島委員、願います。

阿 子 島 委 員 まず、どの者も3・4年生用と5・6年生用の2冊の分冊となっている。各者とも写真やイラストが豊富で、見やすくなっている印象を受けた。また、インターネットの活用ができるDマークやQRコードなどが掲載されており、ウェブサイトにもアクセスして学習ができるように配慮されている。

それでは、A者から申し上げる。目次の次に教科書が「気づく・見つける」「調べる・解決する」「深める・伝える」「まとめる・生かす」の4ステップ構造になっていることが明記されており、内容の見通しが分かりやすくなっている。さらに、各章の始まりには目標の達成までの道筋と学習内容の関係が示されていることで、児童が自らの学習段階を確認できるように配慮されているし、他教科へのつながりも分かりやすく明示されている。項目ごとに掲載されている資料も豊富で、さらに学習を補充するものや発展的なものとなっている。3年生の初めのページには仙台七夕まつりが掲載されていて、児童が親しみを持てると思う。5年生の「けがの防止」の3「交通事故の防止」のところでは、資料に「自転車安全利用五則」が掲載されていたり、4「犯罪被害の防止」では資料に「インターネットによる犯罪被害」や「安全マップをつくろう」などが掲載されているなど、児童にとって身近で取り組みやすい内容を重点的に取り上げ、実践的に理解できるように配慮されている。このほか、「自然災害によるけがの防止」のところでは、地震や津波の際の避難の方法や、資料では「さまざまな自然災害」、「情報の入手」のコーナーなど、防災対応力の育成を目指す内容にもなっている。また、思考・判断したことを記入する「気づいたこと、見つけたこと」の欄が大きく設けられているとともに、6年生の最後のところでは「中学校の生活に向けて健康や安全に関することで目標を立ててみよう」と中学校へつながる記載の欄が設けられている。全体的に児童が学習内容をイメージしやすいように、イラストや写真、マークなどが豊富に掲載されている。

次にB者は、始めに「健康ってどんなこと」と見開きでいろいろなスポーツの写真に掲載し、健康について考えることができるようになっている。目次に続いて、「楽しく学ぼう 健康の学習」と題して、学習の進め方や教科書に出てくるマークの説明が記載されている。3・4年生の巻末には、「安全な生活のために」と題して、外出するときの安全と「自然災害や緊急事態に備えて」が分かりやすく記載されている。5・6年生の巻末には、「みんなの健康を守るさまざまな仕事」として、様々な職業を取り上げており、キャリア教育にもつながる資料が掲載されている。「つかむ」「考える・調べる」「まとめる・深める」などで学習活動が構成されており、見通しを持って学習ができる内容となっている。また、発展のコーナーが設けられており、中学校の内容も記載されている。各章ごとに資料が豊富に掲載されており、ページの下には詳しい情報なども記載されていて、児童の興味・関心に応じて発展的に学習できるように配慮されている。5年生の「心の発達」のところは詳しく記載されていて、3

「不安やなやみへの対処」のところではいじめ問題も取り上げられている。また、「けがの防止」の単元の中の「学校や地域でのけがの防止」では、「犯罪から身を守るために」の内容をイラストと写真で分かりやすく掲載している。その後の「自然災害や緊急事態に備えて」のところも分かりやすく、「安全を守るための緊急の警報についても詳しく掲載されている。いずれもイラストや写真、吹き出しなどが児童の実質生活などに即しており、児童が親しみながら考えられるように工夫されている。

次にC者は、目次の次には、この教科書の使い方が掲載されている。また、3・4年生の巻頭には「健康からつながる夢」として著名人3人が紹介されており、アスリートだけではなく、誰でも運動することで健康につながるということが児童にも理解できるようになっている。章の初めには、学習ゲームを設定し、児童がゲームを行うことを通して学習の課題に気付き、身の回りの生活に関係のあることだと知り、意欲を持って取り組むことができるように工夫されている。「やってみよう」「話し合ってみよう」「調べてみよう」「活用して深めよう」などのコーナーが掲載されており、見通しを持って学習できる内容となっている。「もっと知りたい」のコーナーでは、学習内容に関連した資料が掲載されており、児童の興味・関心に応じて発展的な学習ができるように配慮されている。5年生の「心の健康」の「不安やなやみがあるとき」には具体的な例示が記載されていて、児童にとっても分かりやすいと思う。「けがの防止」の「自然災害から身を守る」では、防災教育として確かな知識と実践力の習得を図る内容が記載されている。挿絵や図表等が効果的に配慮されていて、ページ下には他教科との関連事項やミニ知識が記載されているなど、児童が楽しみながら学べるようになっている。巻末の発展学習では、「受けつがれていく命」や「ともに生きる」が記載されていて、命の大切さやがん患者への理解と共生等について考えさせることができる内容と構成になっている。3・4年生の巻末には、シールが付いていて、「学んだことをふり返ろう」や、4年生の「大きくなってきたわたし」のところで使うようになっている。

次にD者は、初めに見開きで「わたしと健康」と題して、トップアスリートからのメッセージが掲載され、その後、イラストで健康の大切さを伝えるなど、生涯に渡って運動に親しみ、健康の保持・増進を図っていくことができるようにと、運動と健康への関連が伝わるようになっている。また、目次に続き、学習の進め方では5段階の学習課程が設定されており、目標達成に向けて「調べよう」「考えよう」「やってみよう」「話し合おう」などと学習課題が解決できるように工夫されている。さらに、主体的・対話的で深い学びができるように詳しく説明されている。4年生の「体の発育と健康」の「よりよい発育のために」のところでは、食育に関する内容にも関連していることが分かるように、ページの下に家庭と記載されている。さらに、ページの下には関連する教科名だけではなく、豆知識が多数掲載されている。5年生の「けがの防止」の「交通事故の防止」のところでは、「自転車に安全に乗るために」のほか、「歩きスマホは危険」とスマートフォンについての使用にも注意を呼び掛けているのがよいと思う。章の最後の「生かそう 伝えよう」では、学習した内容を実生活に関連付けて考える活動が設定されている。巻末には「共に生きる社会のために」と題して、みんなが安心して暮らせる社会を実現するための身の回りの工夫や取組について具体的に紹介されている。学習事項ごとに下色が変わっており、図表等の大きさや配置が児童に見やすいように配慮されている。

次にE者は、導入では児童にとって分かりやすくイメージしやすい場面を記載し、学習の見通しを持ち、主体的に取り組むことができるように工夫されている。記述する欄を随所に設けていて、話したり書いたりする方法で他者に伝える力を養えるように工夫されている。また、児童の理解度に応じて記述例が記載されている。「振り返ってみよう」「話し合ってみよう」「調べてみよう」などと学習活動が構成されており、見通しを持って学習できる内容となっている。さらに、「発展」のところでは資料を通して発展的な内容にも対応している。5年生の「けがの防止」の「発展」のコーナーでは、熱中症についての注意事項が記載されている。また、「自助」「共助」「公助」について詳しく取り上げられており、防災や社会科と関連付けられるように工夫されている。さらに、達人やアスリートからのメッセージも掲載されている。各章の最後に「まとめ」として「私の〇〇宣言」を記載するようになっていて、みんなで健康になろうという意識を持たせようとする意図が伝わってきた。文字の大きさや字体は用途ごとに変えられて、重要項目や説明文は強調したりするなど、児童が見やすいものとなっている。

教 育 長 加藤委員、お願いします。

加 藤 委 員 まずA者だが、「不安や悩みがあるとき」という5・6年生の章では、対処能力の拡大、自分を取りやすい対処法を知る、リラクゼーションの方法、認知行動療法、セルフモニタリング、アサーショントレーニング等、通常のスプレスマネジメントの手法が取り上げられており、理論ベースでよく考えられていると思った。これらは個々の子どもたちの答えをどう取り上げていくかということが重要になるので、子どもたちに書かせるところまではあるのだが、それ以後の取り上げ方については教員がかなりその技法について専門的な知識を持ってやることが必要になる。思春期の入り口にあって、非常に重要なトピックではないかと思った。また、A4判の大きさのためもあると思うが、考えて書かせる余白が多くとられており、ワーク、ノートとしても使うことができる。日常の生活を見直したり、身の回りのルールに気付いて考えたりするステップというのが丁寧に踏まれている。その気付きを他者に説明し、他者の気付きを聞いていくという中で理解を深めるという流れが感じられた。

それから、B者である。導入のチェックと振り返りのチェックがあり、授業の区切りになる。そのチェックも含め、前の者と同じように余白が十分に取られていて、記入する場所がある。これも児童が授業の中でこの教科書を活用していく上でいいことではないか。飲酒、喫煙を勧められたときの断り方を具体的に示していたり、どう断るか、「考えてみよう」を超えて、実際に行動できるように提案していたりというあたりも、思春期からそれ以降、危険な年齢に差し掛かるに当たって、あらかじめ様々な健康に関する知識を伝えていくという意味で重要かと思った。構成であるが、「つかむ・ふり返る」から「考える・調べる」あるいは「実習する」になって「まとめる・深める」、そして「もっと知りたい・調べたい」となり、単元の最後にそのまとめとして生活に活かしてみたいことを書くコーナーがあり、この生活に戻っていくというところが大変いいところだと思う。また、この者はがんについて1ページを割いて記載をしている。「もっと知りたい・調べたい」のコーナーだが、がんについては患者が増えてきて、小学生であっても、親もしくは家族ががんであるということがまれではなくなっている中で、自分の親の病気と子どもとしてどう付き合っていくかということは、現在実は大変重要な課題になってきている。その中で、第一に子

どもたちに伝えていかなければならないと言われているのが、がんは感染しないということである。このことについて、この者は明記をしていた。感染しないこと、がんになっても仕事をして希望を持って生きている人が大勢いること、また「家の人ががん検診を受けたか聞いてみましょう」などの記述も、その後、中学校へつながる良いまとめ方ではないかと思った。ほかにも、パソコン・タブレットと健康の取り上げ方、そうしたことが取り上げられている。

C者については、やはり見開き、ほかの者もそうだが、2ページで1単元というシンプルさが大変使いやすいなと思った。判は小さいが、細かなイラストが多く、逆に児童が隅々まで見たくなる、探したくなる、そうした興味をそそる部分もあると思う。最初に学習ゲームがあり、まず身の回りのことに気持ちを向ける導入となっていることが効果的であると思った。先ほど申し上げたがんについては、この者では5・6年生の巻末に「はってん ともに生きる」というコーナーで1ページを割いて、自分の母親ががんになり患したある一家のエピソードとして扱っていた。

D者もやはりコンパクトに完結するトピックが多く、分かりやすく、授業にも児童が集中しやすいと思う。他教科との関連や関係した知識につなげる工夫、これが児童にも分かりやすく記載されていた。発展的な内容として、例えば「歩きスマホは危険」、それから「車の特徴を知ろう」等について取り上げられている。交通事故に遭わないために、児童がどうするかということを超えて、ちょっと残念というか社会的には悲しい思いもあるが、児童が車の特徴を知らなければならない、例えば視覚の問題、内輪差の問題、制動距離の問題、こういったことを児童が知って、交通事故を自ら防がなければならない時代なのだなということを思う。一方で、これは重要な知識だなと思った。それから、薬物の乱用について大変丁寧に扱っており、特に死ぬこともある、ということも明確に記述していた者でもある。思春期の心の変化の取り上げ方も丁寧に、特に性別に違和感を持つ児童に対しての配慮もされており、相談窓口も具体的に示されていた。また、この者で印象的だったのは、ストレスの扱いだが、適度なストレスは成長につながるということの指摘があり、「ストレスは悪いもの？」というコーナーだが、ここの考え方も重要な点だと思った。

E者は、3・4年生の導入で児童生徒の先行知識や自分自身の状態確認をし、情報提供したのち、発展を設けている。こうした流れが子どもたちにとって分かりやすいと思う。また、3・4年生で思春期の心身の変化について丁寧に記述されているのもよく分かった。5・6年生で不安や悩みへの対処を取り扱い、さらに「相談することは大変勇気のいること」という記述があり、その上で相談の仕方、相談されたときの寄り添い方など、友人関係にも配慮した取り上げ方が大変実感的で、良いと思った。それから、相談例として性的違和感についての相談を取り上げ、それは「特別なことでも間違っていることでもない」と明確に記述してくれているのも有り難いことである。また、エイズについての正しい知識も記述されている。全体として社会的偏見とスティグマを防止しようという姿勢が強く感じられた。薬物乱用の害についての記述については、身体への影響と心への影響が相互に悪循環になるということが明確に示されている。また、死んでしまうこともあるということも記述されている。危険ドラッグについても明確に記述していて、好ましいなと思った。発展として、熱中症についての扱いについても、これは大変印象的だった。1ページを割いて、その危険信号、その際の対応のフローチャートが記されている。この者は、そういう意味で現代的な



トピックに意欲的に取り組んでいるなど感じた。

教 育 長 中村委員、お願いします。

中 村 委 員 それでは、A者から述べる。学習がステップ1「課題の提示」、そしてステップ2「調べる」「話し合おう」、ステップ3「説明する」、そしてステップ4「まとめる」「生かす」という4段階になっていて、子どもたちが今何をやろうとしているのかということが理解しやすい流れになっていると思う。そして、これによって主体的で対話的な学習ができるような工夫がされているのだと感じた。各章の最後には「学習をふり返ろう」というコーナーがあり、学習した内容がしっかりと子どもたちに定着するような形で学習が流れていく。そして、「自然災害によるけがの防止」を発展的な内容として取り扱っており、地震や津波の際の避難方法など防災に対応する力を育てるという内容になっていて、これはとてもいいことだなと思った。「資料」のコーナーが単元の中に示されており、学習をさらに広げたり深めたりするのにとても役立つ工夫がされている。

B者は、学習が「つかむ」「考える・調べる」「まとめる・深める」という設定になっていて、こちらも子どもたちが理解しやすい流れで、主体的で対話的な学習ができるものになっている。また、学習の内容が見開き2ページになっていて、子どもたちが見通しを持って取り組めるような配列になっているのも良い。単元の終わりには、「ふり返る・深める・つなげる」のページがあり、学習した内容の定着を図ることができるようになっている。また、「もっと知りたい・調べたい」のコーナーでは、「自然災害や緊急事態に備えて」など、学習内容に沿ってさらに子どもたちが興味を持って展開できる配慮がされていると思う。

C者は、章の初めに見開きでゲームコーナーがあり、それを使って学習内容に気付け、学習にスムーズに入っていける工夫がなされていると思う。また、こちらの者も学習内容が見開き2ページになっており、見通しを持って取り組める配列になっている。また、「やってみよう」「話し合ってみよう」「調べてみよう」「活用して深めよう」という学習の流れがあり、「活用して深めよう」では学習した内容を子どもたちが自分のこととして生活に生かせるような投げ掛けとなっていて、主体的な学びができるように工夫されているなどと思った。「もっと知りたい」のページでは、学習内容に沿った内容で発展的な学習ができるように工夫されている。

D者は、巻頭に著名なスポーツ選手の話に掲載して、なぜ学ぶのかということが分かりやすくまとめられていて、子どもたちが興味を持って学習に取り組めるような流れになっていると思う。「学んだことを生かそう 伝えよう」というコーナーでは、学習した内容に沿って自分について振り返ることができるような配慮がされている。そして、「さらに広げよう 深めよう」では、著名人のインタビューや学習に沿った内容で、子どもたちが興味を持って学習を広げていけるような工夫がされている。

E者は、「話し合ってみよう」「調べてみよう」「考えてみよう」などで、書いたり話し合ったりすることで言語活動が充実するように工夫がされている。自然災害に備え、「自助」「共助」「公助」の視点に立ち、普段から防災や減災の意識を子どもたちに持ってもらえるような工夫がされていると感じた。そして、「新しい自分にレベルアップ」というところでは、これまでの学習に沿って、自分自身のことを自分の言葉で表現することができるように配慮されている。これも自主的な勉強につながるものだなと思った。そして、各章の終わりに「私の〇〇宣言」として、今までの学習か

ら自分の目標を自分の言葉で表現し、主体的に明確にすることができるような工夫がされていると思う。

そして、各者ともであるが不安や悩みの対応について全体的にページ数を割いて、とても丁寧に扱っていると思った。今の子どもたちにはとても大切な部分なので、とても良いことだなと感じている。

教 育 長 里村委員、お願いします。

里 村 委 員 A者だが、これはインクルーシブ教育ということを配慮しているのだと思うが、あえて個人差の記述を増やしているというところがすばらしいと思う。そういう中で、多様な人との関わりを示した編集になっており、今の時代、特に大切な取組だろうと考える。具体的に申し上げると、自然災害におけるけがの防止とか、赤ちゃんやお年寄り、障害のある方などの様々な人との関わり、これを写真やイラストを用いて教科書としてつくり上げているということで、ここは非常に大きな特長だと思う。それから、「つなげよう」で家庭科で学習したことが示されており、生活に必要な知識や技能の習得にこの保健でもつなげていこうとなっている。また、いじめのない世界を目指しているというメッセージがこの教科書に入っており、いろいろな形で工夫されている。3・4年生と5・6年生の2冊からなるが、特に5・6年生の教科書の内容はすばらしいと思う。

B者は、むしろ健康の保持・増進の実現に力を入れていると読んだ。実際に健康の学習と、実際の生活や経験を振り返ることで、体験的な学習を取り入れながら実践的な保健学習に結び付けようという意図が感じられる。それから、本市との関係もあるが、いじめの問題とか自然災害を取り上げ、そういうところに力が入っており、書かれている文章は思わず引きずり込まれるようなすばらしい内容になっていると思う。5年生の「心の健康」の授業だが、これは教育的によく書かれているという意味で申し上げるが、知識を学ぶのとは違って、子どもの状況に応じて先生は注意深く指導していかなければいけないのではないかと思う。教科書としての出来がすばらしいということである。ただ、これを使う先生もしっかり勉強して取り組まなければいけないということである。

C者であるが、冒頭私が質問申し上げた「技能」について、具体的に不安や悩みへの対処方法とか、けがの手当てに対する実習が設定されており、編集の中で新しい学習指導要領の改訂の趣旨を大いに反映させようという意図が感じられる。具体的には5年生で「心の健康」「けがの防止」、6年生で「病気の予防」というように、5年生と6年生で分けて教科書を編集してあるが、その点がすばらしいと思う。それから、人間関係や心の健康など、発達段階に応じて、また学年に応じた文章表現が工夫されているということで、適切に学習が進められるのではないかなと思った。

それから、D者である。ここは日常の運動と、食事、そのことと健やかな体の育成が非常につながっているんだという、そういう観点からよくまとめられた教科書だと思う。それから、「さらに広げよう 深めよう」という欄があり、よく整理されていて、基礎的な学習をさらに発展する学習につなげる、そういう構成になっていると思う。A4判の体裁となっており、写真やイラストが大きくて見やすいということから、児童が興味や関心を大いに引きつけられるのではないかと思う。もう一つ、D者の特長は、見開きの2ページで毎時間の学習内容がまとまって書かれているので、児童にとって学習の流れが一目で分かるということだろうと思う。

E者は、同じく新しい学習指導要領の追加に従って、「技能」への対応として5年生・6年生の2年間で同じように「心の健康」「けがの防止」「病気の予防」と教える構成になっている。それから、ここも同じく運動することで健康につながるんだというメッセージを強く出しているように思う。具体的な例を挙げて、健康につながる運動にも積極的に取り組むように指導しているということである。5年生・6年生の教科書は3年生・4年生の教科書の総量として2倍になっていて、その辺も5年生・6年生でしっかりと保健の授業をやろう、そういう教科書にしようという意図が感じられる。そういう中で、地産地消とか郷土料理にも触れており、自分の地元の文化の大切さを伝える、そうした中で食事をする事の大切さも伝えるというようにできていると思う。

教 育 長 各委員から各発行者の特長、感じたことを述べていただいた。5者ということなので、3者程度に絞り込みを行っていきたいと思う。各委員の皆様から、ご自身が推薦する3者について、それぞれ挙げていただきたいと思う。

最初に、吉田委員から願います。

吉 田 委 員 A者、B者、E者の3者である。

花 輪 委 員 A者、B者、D者である。

阿 子 島 委 員 私は、A者、B者、D者を推薦する。

加 藤 委 員 B者、D者、E者である。

中 村 委 員 A者、B者、D者である。

里 村 委 員 A者、B者、D者である。

教 育 長 推薦いただいたものを集計すると、A者が5つ、B者が6つ、C者がゼロで、D者が5つ、E者が2つかと思う。

そうすると、A者、B者、D者の3者でさらに絞り込みを行って参りたいと思う。どなたでも結構なので、このA、B、Dの3者についてさらに発言をお願いしたい。

3者の中の1者ということで、ご推薦いただければと思う。

吉田委員、いかがか。

吉 田 委 員 私の推薦した者は、3者の中の2者という形になった。とにかく、編集内容についてはそれぞれの者が工夫している。ただ、そのレイアウトや資料の数、それからキャラクターとか写真等の大きさ、そういうものが影響してくると思うが、私が推奨したのはA者とB者である。どちらも本当にすばらしい編集内容で、特に私が気にしたのは不安や悩みへの対処というところだった。これも、本当にこの二つの者は丁寧に扱っていて、まさにこの時期に子どもたちが直面することに対する在り方を丁寧に提案していると思った。私の場合、B者とA者を比較した際に、B者は非常に細部に渡って細かいところまで資料も多く提供している。それに比べて、A者はやや余裕があると思った。それから、紙面のコーティングの在り方が、片方はあまりコーティングされていない、片方はコーティングされている、目に対する影響とか、それから書くときに鉛筆で果たしてどうなのかという心配もある。比べればいろんな違いがあるのだが、全体的な印象、レイアウトということでは私はA者を推薦する。次いでB者という印象を持っている。

教 育 長 比較的な面でA者という声があったが、ほかの委員の皆様、どうか。

花 輪 委 員 私はA者、B者、D者を推薦したが、実はAとBが一つ抜きん出ているかなと思った。どちらかだろうと。今、吉田委員がいろいろ分析されていたが、ほぼ同意する。

この保健というのは3年生、4年生、5年生、6年生、全部単元が違う。テーマが違う。そういった意味で、4年間この2冊の教科書を本当に目の前に置いて使ってもらいたいという気がする。そういった面から見ると、B者が、例えば非常に単純なことだが3年生の教科書に身長を6年生まで書かせている。ということで、私はそういう意図があるのかなと感じた。つまり、確かにここは3年生、ここは4年生、ここは5年生、ここは6年生というように学ばせているが、そうではなくて、いつもこの5つのテーマは考えてほしいんだというようなメッセージが色濃く出ているということ私はB者を感じた。A者は、吉田委員がお話しされたように極めて優れたデザインで、かつ情報がすごく多い。先ほども言ったように資料の項目が極めて多い。その分だけページ数が多いが、さてどちらかなというところで、私はAとBのどちらかにしたいなと思うが、まだ迷っていて、ほかの委員の皆さんのご意見などを聞きたいと思う。

中 村 委 員 私もA者かB者を推薦したいと思っているが、やはりどちらもとてもよくできていて、ここはこれが素晴らしい、ここはこれが素晴らしいということで、今同じようなところを見比べているので、もうちょっと待っていただけるとありがたい。

教 育 長 承知した。かなり迷っているということで、少し検討の時間をとりたい。

里 村 委 員 もしできたら事務局の皆さんのご意見を伺いたい。実際に保健を教えていらっしゃる先生方、教えやすい教科書とか、あるいは教えるときにどういう点をご苦労されているとか、その辺のところはもしあれば参考にしたいなという気持ちである。

教 育 長 実際学校現場で保健を扱っている際に、児童の課題とか、あるいは先生方が留意して授業で対応していること、こういったことを少しお話ししていただければと思う。

指 導 主 事 保健の授業の中で行われる時間は限られているということから、ある程度効率的、計画的に進めなければいけないという部分がある。若い先生が多いため、段階的に進めるという点がある。ある程度統一性があつた方がいいのではないかとということがあつる。皆様から出ているある程度段階を踏んだ表記であれば、学習の見通しを持って子どもたちも、そして先生も指導することができるのではないかとこの声がある。

加 藤 委 員 私が推薦した三つの中で残つたのが二つだったので、具体的にはB者とD者になるのだが、私はB者を取り上げたいと思っている。B者の良かった点については先ほどお話ししたので繰り返さないが、やはり分かりやすい見開きで、コンパクトにまとめられていて、それが必要十分にまとめられていて、そして「もっと知りたい・調べたい」というところで発展しているという構成が分かりやすい点。それから、先ほど吉田委員のほうから出たように例えば鉛筆で書き込むときに、確かにこれはつるつるして書きにくいだろうなと今思った。ちょっとその難点はあるが、内容的にはB者を薦めたい。

教 育 長 ほかの委員の皆さん、どうか。

阿 子 島 委 員 私が推薦した者は全部入っていたので、かえって悩んでしまうが、それぞれに全部の者がいい本だなと本当に思う。それで、先ほど花輪委員がおっしゃったようにこれは各者ともその学年が終わったら教科書をしまうのではなくて、たぶん6年生まで使えるように配慮されているという印象を持っている。そこで、最初のページを開いて見ていたが、「健康を守る活動」の中の「学校」のところはA者の方が学校の職員の中にスクールカウンセラーとかスクールソーシャルワーカーのことが提示されている。これは仙台市内でも問題になっている不登校の件とかいろいろなことで、学校に

はこういう方々も職員として来ているのだということ子どもたちに3年生の段階で教えていくのもいいのではないかと思う。B者の方は薬剤師とか学校医とかそういうことは載っているが、最初の3ページにA者にはこれが載っていた。だから、それもいいのかと思った。最後の「まとめ」のところで、どちらも「まとめ」はとても分かりやすいが、A者の方は、単元のところに、またもう一回振り返って自分で見られるようなページの紹介も載っているし、コンピューターやスマートフォンと健康というところも掲載されているので、どちらかを比較するとしたら私はA者を推薦したいと思った。

教 育 長 ほかの方、ご意見いただきたいと思う。

里 村 委 員 今、事務局の方から説明いただいた学習の見通し、やっぱり先生も、それから児童も見通しを持って学びが必要とのお話があったが、その観点からこの3者のうちどれが優れているというふうに皆さんお考えになるか。

教 育 長 里村委員からご提案があり、見通しという視点で見たときに、AとBとDの3者での見比べというか、評価も入れていただきたいと思う。

加 藤 委 員 学習の目当てについては、3者とも全部単元の前にはほぼ同じ言葉で、文体は違うが内容は同じものが掲げられている。入り口は一緒だが出口はちょっとずつ違うかもしれない。

里 村 委 員 例えばこれも正しいかどうか分からないが、3者の3年生・4年生の最終ページを見ると、次の学年の5・6年生で学ぶことという記載については3者でだいぶ違いがある。だから、見通しを持って教えたいという意味がどういう形で教科書に反映していったらいいのかというのが分かりかねる。例えばそこだけで比較するのは決して正しいとは思わないが、D者の3年生・4年生の最終ページは、5年生・6年生への橋渡しは書いていないように思う。それに対して、A者とB者は内容の違いはあるが特にA者の方は5年・6年で学ぶことへの展望がよく書かれているような気がする。こういう比較が「見通しを持って」ということと直接結び付くのかどうか、よく分からない。だから、「見通しを持って」という事務局のご説明の中身についても、私よく理解していないのかもしれない。再度聞きたいのは保健の授業をなさる先生方はどういふところにご苦労されているのか、どういふところに気を配ってやられているのか、その辺のところをもう少し細かく教えていただければ、それに沿った教科書ってどれだろうという検討ができる。

教 育 長 指導主事、どうぞ。

指 導 主 事 保健の授業時数を具体的に申し上げますと、小学校3・4年生はそれぞれ年間8時間程度である。一方、5・6年生は16時間というような、ある程度限られた時間ということがまず1点。そして、その8時間というのは学校の実態によっても実施時期が違うかとは思いますが、集中してやるところもあるし、そうでないところもあるかもしれない。自分の学年の1単元の中の見通しといった点で、次にこういう勉強をするということが子どもも教師もつかみやすいのが良いということが現場の先生からの声ではないかと思う。

里 村 委 員 今お話いただいて、そうすると例えば8時間しかないという考え方に立つと、この3・4年生の教科書1ページ1ページをよく見ながら教えるという機会はあまりないという理解でよいか。想像よりも非常に時間が短かった。だから、逆にそういうことであれば、子どもたちが自分で見て分かるような教科書のほうが、なおいいという考

え方が成り立つのかもしれない。何が載っている、何が載っていないという比較よりは、もう少し広い形で教科書の良し悪しを検討してみるのも一つの手じゃないかと思う。質問である。要すれば、1ページ1ページきちんと子どもたちに説明することはされていないという理解でよいか。

教 育 長 例えば3・4年生の本を開くと、大体40ページくらいである。それを2学年だから1学年で20ページくらい。それを8時間でやるとすれば、1時間で2.5ページなので、細かくたどり着くことができるかなと思う。

里 村 委 員 そういう意味ではきちんとたどり着ける。それで5・6年生は倍の時間があるし、たどり着けると考える。

教 育 長 結構丁寧に説明して、授業はできていると思っている。

里 村 委 員 最初の質問に戻るが、そういうきちんとした時間の中で先生方はどういうことに悩まれているのか。その辺が分かればと思う。教科書があまり細か過ぎて時間が足りないというのか。見通しを持ってやりたいという意味がよく分からない。

指 導 主 事 例えば8時間の授業の中で、4つの段階を踏まえるとしたときに、自分の生活を見る、それから課題を出す、それから調べる、そして実行に移すといったようなことを行ったときに、ある程度自分1人の力で、また、能率的にその教科書一つで学習を進めることができるというところが、教員の立場としては望まれるところではないか。

教 育 長 何か皆様方から1者に絞る方向の提案なりご意見なり、いただければと思う。皆さん、どうか。

里 村 委 員 今ちょっと議題にさせてもらった見通しという意味では、今挙がっている3者ともにそれなりの工夫があって、大きな違いがないように思う。例えばD者で言うと、やはり初めに「調べよう」「考えよう」というようにずっと、「話し合おう」という構成はできているし、今手元にあるB者についても「つかむ」「考える・調べる」というふうになっているから、もしこういうところのレイアウトがきちんとしていることが教えやすいということであれば、3者とも大きな違いがないという理解でよろしいかと思う。

1者に絞るとするのは非常に難しいことだが、私が調べた結果を申し上げますと、実は第一印象はB者が一番良かった。ただ、B者は鉛筆が滑るということがあったから、やっぱりそれは決定的に不味いのであれば違う結論を出すべきだと思うし、そうでなければそうでないと、はっきりしたらいいと思う。

教 育 長 表面が滑りやすいというB者の特徴が、発言としてあった。事務局で確認したが、特に大きな支障ではないということなので、そのように共通理解したい。

委員の皆さん、いかがか。

花 輪 委 員 まだ2者に絞られていないという理解なのか。それとも、A者、B者の2者に絞られているのか。認識が違うように感じている委員の方もおられると思うが、私は先ほど言ったようにA者かB者のどちらかだと思う。情報量のA者で、B者は精選して分かりやすく伝えるという特長があり、保健という時間の中でA者の情報量というのはこなせるのかというのがちょっと心配のまま、ここに臨んでいた。その点、B者というのは非常に素材を精選していて、なおかつデザインがとても良くて、フレンドリーである。

加 藤 委 員 どういう問いをこの教科書の中に置いて、そして書かせようとしているかというところを見たときに、なぜB者を選んだかということ、素材を置いて、そして話し合った

り、それから自習をしたりその後、「これを使った後どんな工夫をしようと思ったか」とか、「友達が挙げたものの中で参考になった方法は何か」とか、「友達が言ってくれたこと、ほかの人が見付けたことの中で自分が気づけなかったことや、なるほどと感じたことを書いてみよう」という、こういう問い掛けをしている。それは、表を見て気付いたことや考えたことを書こうとか、ほかの人の意見を聞いて気付いたことや考えたことを書こうというものを超えて、その段階でもう十分に気付いて、同じ答えが出ればいいが、より一歩、ワンステップ上げていこうという、日常生活を一つ引き上げようという方向で問い掛けられているので、それが最終的に「生活に生かしてみたいことは何だったか」という振り返りにつながるところが、大変ポジティブでいいなと思った点だった。

中 村 委 員 私が推薦したのも3者とも入っており、いろいろ悩んではいたが、先ほど里村委員がおっしゃったように私も第一印象はB者だった。A者は本当に細かいところまでたくさん載っていて、自分で読んでいても「ああ、こんなこともあるのね」「こういうこともあるんだ」「こういうふうを考えるんだ」というようなことで、たくさん情報量があって、楽しいのだが、やはり子どもたちが1時間の中で考える、調べる、そしてまとめる、今後この授業の中のことをこうやって生かしていこうということまでを話し合ったり、自分の考えをまとめたりということであれば、学習内容、見開き2ページになっていることで、ここまで行ったらまず一つの授業の流れなんだよというのが分かるような形になっていて、そして量的な問題もこのくらいのほうがいいのかなと思う。この見開き2ページで大体終わるといような形だと、先生も授業の内容をより深く教えることができるのではないかというような感じを最初に持ったので、私はB者を推薦したいと思う。

教 育 長 A者、B者、D者3者で、どちらかというとならA者とB者についてのご意見が多い。保健の場合、知識を子どもたちに与える、知識を得ることと、それからそれを身につけさせる、実生活で生かすという視点が大事なのかなという感想を持った。今どちらかというとならB者については定着ということを特に意識されての発言が多かった気がするが、最終的に1本にまとめたいと思う。A者、B者が意見が多いので、定着という点でどっちが優れているという点を中心に、その他についても結構なのでご意見をお寄せいただきたいと思う。

先ほど花輪委員からお話があったが、花輪委員はA者とB者を考えたときに、知識を身に付けさせるという視点ではどう受け止めているか。

花 輪 委 員 十分対応する時間があれば、工夫があれば、A者がいいのかなと思う。やはりどれだけ保健に時間が割けるのか、先ほど時数の話があったが、先生の準備も含めての対応ということをお願いしたいのだが、B者もすごく優れた教科書だと思う。でも、いろんなところに気を配っているのはA者かなと思う。それで、先ほど言ったようにAとBを比べると情報量が30ページ程度違う。その30ページ程度というのは、最初にあまり明確にできずにこの場に臨んでしまったが、十分先生の準備ということも踏まえてこなせる教科書かといったときに、A者はいろんな観点から情報を載せているということで、A者を使って先生にやっていただければいいのかなという期待も込めてA者ということになった。

教 育 長 阿子島委員、いかがか。

阿 子 島 委 員 私もやはり推薦した3者が全部入っているのでとても悩み、ピンポイントで見比べ

てみようかなと思って、「AED」のところを見ていた。「AED」の使い方はA者のほうがとても詳しく載っている。今の段階でもいろんなところで「AED」を使って助かったという話を聞いているので、子どものうちから、自分で直接使えなくても、そのときに誰か人を呼んだりとか、そういう点にもつなげていけるように、子どもたちが教科書を見ていて気が付く、これから子どもたちが成長していく中で、そういうことも大切なのかなと思った。けがのところでは、歯のけがについて記載されているのは3者のうちここだけだった。子どもたちは成長段階で歯が抜けることが多いと思うし、遊んでいて歯をけがするというのも結構聞くので、一言先生から授業で言っただけのもいいのかなと思い、私はA者を推薦したいと思っている。

里 村 委 員 皆さんの意見を伺っていると、意見に相違はない。つまり、内容の濃いものを選ぼうというのであれば皆さんA者とおっしゃっているわけなので、ただ実際の現場でそれを、時間的にも、ほかの科目もあるわけだから、その教科書を使いこなせるかというのが疑問である。だから、意見に違いはないと思う。詳しくれば詳しいほどいいのだというふうにも皆さん思っていないで、それだけ本当に使いこなせるのだろうかという心配なので、やっぱり現場の先生方の実情とか問題点とか今後の方向をよく理解した上で決めていかなければいけない。そのところは、少なくとも私は現場の状況はよく分かっていないので、それで見通しというお話は貴重な情報だった。しかし、その観点からはあまり差がない。例が悪いかもしれないが辞書を買うとき、高くて厚い辞書のほうが言葉がいっぱい書いてある。だけど、それでいいかという問題もある。適当なボリュームの教科書というのは何だろうかというように問題が移っている。少々厚くなっても構わないと言うのか、必要なことがコンパクトに載っているのが良いと思ってらっしゃるのか、それは現場も先生によって違うと思う。すると、やっぱり教科書を担当している課でどう考えるかということをごく聞きたい。

教 育 長 絞ったどの者も一定の評価がなされたわけだが、特に大きな違いとして、A者とB者を比べての発言だが、A者が総ページ124ページ、B者が92ページである。この分量の違いが一つ大きなところである。この点について、124ページ、92ページの違いを現場でうまく指導できるか、子どもたちが理解できるか、知識を身に付け、実践で生かすという点でどうなのか、そういった視点での検討も大事であろうと思う。事務局からこの点について説明をお願いしたい。

指 導 主 事 保健の場合、30ページ程度の分量の違いであれば、先生方はそれほど負担だとは思わないと考える。また、先ほども申し上げたが若い先生方が多くなってきたという仙台市の現状の中で、一般的にだが、児童も教師も、学習の進め方が分かりやすい教科書であれば、差も生まれにくいし、指導の見通しも持ちやすいのではないかと思う。

教 育 長 事務局からは学校現場の実情として、分量が多いことは、それほど保健の授業に影響しないこと、取り扱いやすいことが指導にも関係するという説明があった。この点を踏まえてB者をご推薦いただいた3人の委員に伺うのがいかかがか。

中 村 委 員 要するにB者はどちらかということ先生主導になるのだろうが、A者で細かく学習するほうが子どもたちにも教えやすいということなのだとなれば、分量上、大丈夫ということで、A者でも構わない。私は量が多いことによってさらっと授業が行われてしまうのは困るなど思っていたので、もしそうでないのだとなれば内容的には問題ない。

教 育 長 加藤委員、いかがか。

加 藤 委 員 私が挙げていたのは量的な問題ではなかったもので、直接はお答えしにくい。資料を



読み取る力とか、自分たちで調べたり持ち寄ったり、先生方の余談、そういった余地、話し合いみたいなことでいくらかでも時間は使うのだろうと思う。素材として必要な分が載っているということと、日常生活から取り上げて、学んだことを日常生活に戻して振り返るといったところに良さがあるということでB者を選んだ。ただ、A者が悪いとは決して思っていないで、A者でも先ほど申し上げたように日常生活を見直したり身の回りのルールに気付いて考えたりというステップが丁寧に踏まれているので、そのことを授業の中で生かしていただけるのであれば、問題はないと思っている。

教 育 長 里村委員、分量のことは現場の声も出していただいたが、いかがか。

里 村 委 員 そういうことであれば、A者で結構である。

教 育 長 了解した。

さまざまな視点でご議論をいただき、現場でもきちんと対応可能であり、情報量が多く、いいのではないかとのご意見もいただいたので、これまでの議論を踏まえてA者ということで採択の候補としたいと思うが、よろしいか。

(異議なし)

それでは、保健についてはこれまでの議論を踏まえた内容を採択理由とし、事務局に整理してもらい、最終的な決定を26日にしたいと思う。

10分ほど休憩をとり、3時55分再開する。

(休憩 午後3時45分～午後3時55分)

#### 【小学校 道徳】

教 育 長 次に、道徳についての協議に入る。

事務局から、学習指導要領の目標等について説明をお願いしたい。

教育指導課長 担当指導主事がご説明する。

指 導 主 事 小学校道徳について説明する。

小学校道徳では、学習指導要領第1章総則に示される道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることを目標としている。

新しい学習指導要領では、道徳に関して道徳的諸価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深めることを、学習活動を具体化し、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習へと、より具体的な表現で表すというような趣旨で改められた。

協議会において取りまとめた小学校道徳の全発行者の特長は、別紙資料2、報告の18ページにお示ししている。

主な特長については、まずA者は「きづき」と「まなび」の2冊構成により、読み物を読んだ後、課題意識を持ったり、道徳的価値に迫ったりできるような工夫がなされているということである。

次にB者は、自己を見つめ、考えるきっかけとして道徳ノートが活用でき、それをもとに話し合いを進め、対話的な学習活動へつなげられるように工夫されているということである。

次に、C者は別冊の「道徳ノート」や「心のベンチ」は、自分の考えや友達の考えを記入することができ、多面的・多角的な思考に結び付けることができるということである。

D者は、全学年において最初のページに「みんな生きている みんなで生きている」を掲げ、6年間を通して道徳科で大切にしたい内容が伝わるように配慮されているということである。

E者は、「学びの足あと」で毎時間の振り返りができるとともに、シートの中心にある心の変化の矢印にも興味が湧くような工夫がなされているということである。

F者は、各学年とも学習を進めるために「道徳の時間が始まるよ」が掲載されており、道徳の学習に入りやすくなるように配慮されているということである。

G者は、仙台出身の羽生結弦選手などが題材となっていたり、東日本大震災が取り上げられていたりするなど、児童にとって身近な内容が多く見られるということである。

H者は、「考えよう」「深めよう」「やってみよう」の提示は、児童の実態に応じた指導を容易にし、学びをこれからの生活に生かすことにつなげることができるということである。

教 育 長 ただいまの事務局の説明について、何かご質問等はないか。

吉 田 委 員 これから我々それぞれ各者について意見を申し上げるわけだが、今、現在使われている教科書については、別冊ノートが付いていない。それで、実際学校現場でどのような形で、その他のノート等を活用されているのか、分かっている範囲で教えていただければと思う。

指 導 主 事 学校訪問等での授業の様子を見ると、教師用指導書にあるワークシートを活用している学校と、学校独自のワークシートやノートを授業のねらいに合うように工夫して使用している学校があった。また、現場の先生方からは児童の実態に応じて指導の工夫ができるものが活用しやすいという声を聞いている。

吉 田 委 員 今お話があった指導の工夫ができるものが活用しやすいというのを、もう少し具体的に教えていただければと思う。

指 導 主 事 ノートという形で出ているものもそれぞれの特長はあるが、子どもの実態に応じて自分でタイトルを付けたりとか、発問を書いたりとか、教師が工夫できる、学校独自のノートだと工夫する手立てがある、それが使いやすいというような声を聞いている。

教 育 長 他にご質問はあるか。

(質疑なし)

それでは、各発行者の特長について委員の皆様からご意見をいただきながら進めていきたいと思う。

最初に花輪委員はいかがか。

花 輪 委 員 道徳だが、四つの大きなテーマがある。自分自身のこと、他者との関わりのこと、身の回りの人との関わりのこと、自然や生命との関わりのこと、この四つの大きなテーマの中から素材を選んで構成するというのが道徳の教科書である。者によって考え方にやはり差があるんだろうと思う。調べてみたら、先ほどの四つのテーマからいくつ素材を選ぶかというのは各者独特なように思った。

まず外形的な比較をする。判の大きさは8者中6者がA B判、E者がA B判とA 4判の中間判、C者がA 4判、三つのタイプがあった。

別冊のノートの有無だが、A者、B者、C者、3者が別冊のノートありで、ほかは教科書の中に記入するような形式をとっている。

分量である。かなり差がある。最高はノートも合わせて1、300ページを超えるC者から、920ページ程度のH者まで400ページの差がある。これはいい悪いを言っているわけではなくて、外形的にはそういう差があるということを今の段階では話している。

単元、素材の数だが、ほとんどが35程度だが、者によっては40程度を選んでいるところもある。

以下、各者について簡単に意見を述べる。

A者である。教科書が「きづき」、ノートが「まなび」と名付けられている。教科書には教材が淡々と並んでいるだけであり、教材を理解したのちには学習ノートに移り、指示された内容をノートに記載するというような方式をとっている。いじめ問題については年に数カ題、関係する素材が使われている。他者に比べて、個人の活動を重視するような教科書だと思った。6年生の教科書には世界人権宣言が30条まで省略しないで掲載されているのは、大変好感が持てた。教材と資料以外は教科書に印刷されていないということで、極めてすっきりした読みやすい教科書に仕上がっている。

B者である。教科書には「みんなで考え、話し合う」という副題が、ノートは「自分を見つめ、考える」という副題が付いている。ノートの前半だが、教材に関連はしているもののやや独立した内容の教材である。後半は学習記録になっている。「みんなで考え話し合しましょう」を推奨している教科書である。だが、特にここで「みんなで考えましょう」等々の指示はない。教員の裁量が大きい教科書ではないか。教材は4ページまでの短いものが多く、デザインもすっきりしており、教材が読みやすい教科書である。いじめ問題については特化して取り上げられていなかった。世界人権宣言も扱われていなかった。

C者である。教科書には「生きる力」の副題がついている。ノートは各教材に一つの課題が書かれており、その課題も数行の、自分の考えがまとまるようにデザイン構成されていた。単元の教材名の前にテーマと「何々について考えよう」との短文が配置されていた。教材の途中には問い掛けではなく、教材の最後に「考えてみよう」で1項目、「見つめよう 生かそう」で1項目の問い掛けがある。このようなスタイルは全学年で一貫している。各学年、6年生では5回ほどだが、単元の後に「心のベンチ」、これは公園にあるベンチ、休む場所という意味だが、それを設けて、単元を深めさせるような工夫をしている。例えば6年生では他人との信頼関係を問題にした教材ののち、「いじめについて考えよう」と題する「心のベンチ」があった。テーマは様々だが、いい題材を選択して、この欄に取り上げていると思う。同じく幾つか、6年生では三つだったが教材の後に「学習の手引き」があり、グループ学習を行わせている。教員、児童にとって分かりやすい指示だろうと思う。児童にとっても教員にとっても扱いやすい教科書のような印象を受けた。一方で、教材、「心のベンチ」、「学習の手引き」、ノートと、こなさなければいけない量が多いのかなという懸念も持った。世界人権宣言だが、抜粋の形で取り扱っている。

次にD者である。道徳の4テーマとは別に、各学年、各学期で扱う三つの独自テーマを設けているのが特長。例えば1年生で申し上げると、「一ねんせいになったよ」「まわりの人となかよくね」「みんなでいっしょに」などというくりで教材を並べ

ているのが特長である。学習の進め方はほぼ全ての素材で一緒であり、「考える」でも四つある。「話し合ってみよう」「読んで考えよう」「演じて考えよう」「書いて考えよう」と、これを強調しているのも非常にユニークな教科書であると思った。いじめについては、1学年から毎学年「いじめを許さない」、そういう題材でいくつかの教材とコラムを配置して、特化している。世界人権宣言も6年生で30条全部取り扱っているのも私は好ましいと思った。

E者である。教科書の冒頭には、道徳を学ぶ意義、あるいは教科書の使い方など、手引きを詳しく述べているのは大変結構だと思う。教材の途中の脚注にキャラクターによる問い掛け、一種の学習指導補助が数か所書かれている。これはこの者のみの独自の試みである。素材は多くのもので4ページ以内に収まるように配慮している。これは国語とは違うので、大変結構だと思う。教材は道徳4テーマをばらばらに並べているが、ところどころに、例えば6年生だと「きまりの意義」など独自のテーマで複数の教材を並べているのはいい試みだと思う。いじめの問題の取り扱いは、間接的である。5年生で子どもの権利条約を紹介している。この中で世界人権宣言があることを記載している。

F者である。冒頭に各教材と道徳4テーマとの関係を示し、学習の進め方、道徳の狙いなどが書いてあるのはスタートアップに大変いいのではないと思う。教材の題名の前にキャッチコピーがあるだけで、読む観点、考えてほしい観点等は書かれていない。2～4ページ教材の後に「考えよう①」「考えよう②」という二つの問い掛けを置いている非常にシンプルな構成である。これは全ての学年に統一されている。教材そのものは独自のものが多という印象を私は持った。高学年では、道徳4テーマの中で自分、人、生命、自然から7～8テーマ、社会との関わりが12～14テーマということで、各学年統一しているが、社会との関わりのところを力を入れているという印象を持った。全体的に教員に裁量が委ねられている教科書という印象を持った。いじめ問題である。1年から「いじめのない世界へ」と特化して、2つの題材を扱って、真正面から捉えているのは私は好印象だった。

G者である。先ほどF者について言ったが、他者と比較してこの者は道徳4テーマをほぼ同数ずつ取り扱っているのが特長である。教科書の冒頭部分に1年生から、質問項目はちょっと違うが、「自分のことを書いてみよう」のページがあるのはユニークで、毎年自分を見つめてみるというのは大変いい試みだと思う。教材は、道徳4分野のどの教材かが、きちんと明記されている。教材の後ろに「考えよう」の欄があり、二つ程度の視点が書かれている。これもシンプルな構成である。5年生に「いじめをなくすために」の1教材はあるが、全学年に渡ってあるわけではなく、特化して取り扱われていない。6年生に子どもの権利条約の紹介があるが、世界人権宣言は扱われてない。大判だけに余裕がある印刷の教科書で、大変見やすいものである。ページ数は少ないが、分量は平均的ではないかと思った。

最後にH者は、例えば「くじけずに努力する」など、別の副テーマを持たせて、そこに複数の教材を配列しているのが特長である。教材、題名の前に副テーマが記載され、教材名が列記されて、教材が始まる。キャラクター「とりどり先生」が登場する。教材の冒頭や末尾で同じく読み取る、あるいは考える視点、あるいは解説、説明などを提供しているのがこの者の特長である。教材はオーソドックスなものが多いのではないかなと思う。コラムや情報、資料のコナーは、全くないわけではないが極めて

限定的である。これが原因で総ページ数はこの者が一番少なく、最少の教科書となっている。この者の教科書も教員の裁量が大きくあるものとの印象を持った。シンプルな構成なので、全編大変読みやすい教科書に仕上がっている。いじめに関連する教材はたくさんあるが、特化して取り扱われていないと判断した。

教 育 長 阿子島委員、いかがか。

阿 子 島 委 員 それでは、A者から申し上げたいと思う。各学年とも教材文を掲載した「きづき」と、発問や体験的学習を掲載した「まなび」の2冊で構成されている。教材から道徳的な課題や教材と自己の関わりに気付くように、児童の主體的な気付きを引き出し、それぞれの気付きを交換し、対話を通して学習を深めていくとともに、発見した気付きから考えて学ぶ、考えたことを交流で深め学ぶ、学びを自己につなげるというように配慮されている。現代社会を生きるために必要な事柄が学べるよう、いじめ問題、情報モラル、防災・安全教育、オリンピック教育などに関する教材が掲載されている。さらに、自らの生き方について主体的に探究を促すために、「命」、「人」、「文化」、「夢」との4つのつながりをもとに教材が選定されている。全学年を通して「ともにいきる」を設定して、いじめをなくし、人との関わりについて考えるように配慮されている。なお、「まなび」には発問だけではなく書き込める欄が設けてあり、学びの記録や児童自身の学びの実践が深められるようになっている。また、道徳的価値をより実践的なものにするために、「まなび」の「つなげていこう」では自己の未来につなげる振り返りができるようにするなどの工夫がなされている。「まなび」の中には他教科の学習や総合的な学習の時間などで生かせる様々な言語活動が豊富に盛り込まれており、他教科との関連に配慮されている。内容項目や多様な学び方がマークで示されており、学習内容が児童にも一目で分かるように工夫されている。

次に、B者である。本編と別冊「道徳ノート」2冊で構成されており、併用することで人の生き方のよさや自分自身について考えを深め、道徳の目標が達成できるように工夫されている。いじめに向かわない態度の育成や基盤となる道徳性の育成を目指し、人権尊重、いじめ防止についてさまざまな角度から考察できる教材が各学年に掲載されている。また、生命の尊さ、親切、思いやり、善悪の判断、自立、自由と責任に関する教材を掲載し、指導の重点化を図るようにしている。さらに、スポーツ選手や歴史上の人物に関する教材、童話や漫画、感動教材など、多様な教材が取り上げられており、児童の学習意欲を高めるように工夫されている。低学年は場面絵を多く記載しており、視覚的に内容が理解しやすいものになっている。また、高学年になるにつれ、抽象的な思考を促すような教材を増やし、考えを深めるように配慮されている。別冊には「学習の記録」、「体験学習の記録」、「話し合い活動の記録」等のページがあり、ノートの書き込み欄も3年生まではマス目を書いてあり、4年生からは罫線と、児童が負担感を持たないように工夫されている。本冊の「学習を広げる」には、関連する本や人物が紹介されており、他教科との関連を図ることができるようにも配慮されている。分冊ノートは本冊の巻末に収納できるように工夫されている。

C者である。各学年、本冊と分冊「道徳ノート」の2冊で構成されている。巻頭のオリエンテーションのページに学習の進め方が明記されており、見通しを持って主体的・対話的に学習が進められていくように工夫されている。1年生は幼保との連携、高学年においては中学校段階との接続を考慮するなど、発達段階を踏まえた系統性が意識されている。生命の尊厳、自然、伝統と文化、先人の伝記、スポーツ、情報化

への対応など、多様な内容の教材が隔たりなく配置されている。いじめ防止等重要なテーマに関わる教材については、複数の教材が配置されていて、学級の状況に応じて関連的・発展的に扱うことができるように工夫されている。教材と関連した内容や活動を例示した「心のベンチ」のページにも、発展的で充実した学習が展開できるよう工夫されている。いじめについても、3年生では「いじめをなくすには」、4年生は「なくそう！いじめ」、5年生は「いじめの傍観者」、6年生は「いじめについて考えよう！」など、それぞれの学年に応じて考えるような教材に仕上がっている。別冊の道徳ノートは、自分の考えや友達の考えを記入する欄が設けられており、物事を多面的・多角的に考えることができるように工夫されている。ペアやグループでの学習形態が各所に示されており、児童が多様な個性を生かした学習が展開できるように配慮されている。また、道徳ノートの記述の蓄積により、児童の個性や能力に応じた成長の様子が把握できるようになっている。教材の種類を示す記号や、6年間共通して登場するキャラクターの活用など、児童が親しみを持って学習に取り組めるように工夫されている。

次にD者である。各学年1冊ずつである。初めに道徳では何をどのように学ぶのか、何について考えるのかを確認するページが設定され、道徳の授業で学んだことをはっきりと自覚できるようになっている。いじめ問題や生命の尊さに関する教材が十分に取り入れられ、児童が命を大切にす心情を育めるよう配慮されている。各学年に呼び掛け、教材、コラムを組み合わせた現代的な問題を取り扱うユニット、「情報と向き合う」「いじめを許さない心」「自然と共に」「共に生きる」「世界とつながる」を5か所、1・2年生は2か所が、位置付けられ、学習の充実と発展が図られるように工夫されている。生命の尊厳、自然、伝統と文化、先人の伝記、情報化への対応、スポーツと多様な教材がバランスよく配置されている。問題解決的な学習に適した教材が豊富に取り入れられ、話し合い活動を通して物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について考えを深めることができるように配慮されている。児童が自己評価を書き込む学びの記録が設定され、記述の蓄積により児童の個性や能力に応じた成長の様子が把握できるように配慮されている。「つなげよう」には教材に関する図書や人物が紹介され、他教科や日常生活との関連が図られるように工夫されている。各学年共通して登場するキャラクター、漫画、イラスト等も活用し、児童が親しみを持って学習できるように工夫されている。

次にE者である。E者は各学年1冊ずつである。初めにオリエンテーションのページが設定され、学び方やノートの記載例が掲載されている。そして、道徳で学習したことを日常生活で生かし、また日常生活からの問いを見付けて、道徳の学習へ帰っていくというスパイラルでの学習が示され、児童の主体的な学習態度につながるように工夫されている。現代的な課題への対応やいじめ防止に関する教材が各学年で設定されている。重点的な指導を必要とする生命の尊さについては、6年間の系統性に配慮し、学習の充実をより図ることができるように工夫されている。著名人の話や実話、定番の読み物など、多様な教材が用意され、内容もバランスよく配置されている。地域に根付く伝統や文化、行事、先人など、児童にとって身近なものも教材として取り上げられている。また、世界や日本の文化遺産のコラムで、社会科と関連付けたり、読み物の教材で特別活動と関連付けたりするなど、多様な学習が行われるようにも工夫されている。キャラクターを通して様々な問い掛けをし、物事を多面的・多角的に

考えられるように工夫されている。巻末には自己評価シート「学びの足あと」を設けて、児童が学びの振り返りができ、自己の生き方について考えを深めることができるように工夫されている。

次にF者である。こちらも各学年1冊ずつである。初めに、これから1年間で学ぶことについてオリエンテーションのページが設定されている。道徳の目標達成のため、他人とのコミュニケーションを通して道徳的諸価値について考えることができるよう、児童同士の交流を促す教材が工夫されている。今日的課題であるいじめ、防災・安全、情報モラルについて考えることができる教材が各学年で設定されている。特にいじめ問題に特化したユニット「いじめのない世界へ」は、扉ページ、直接的教材、間接的教材からなり、重点的に扱えるよう全学年に掲載されているのがとても特長的だと思う。また、児童の生活に即した内容の読み物の教材が取り上げられており、自分自身のこととして考えながら、学習の充実と発展を図ることができるように配慮されているとともに、感動的な読み物の教材や身近で共感を呼ぶ教材など、幅広い内容が取り上げられている。そして、まとまりごとに自分を振り返るページが設けられ、児童自身が成長に気付くことができるように工夫されている。3年生から6年生には、問題解決的な学習ができるような教材を配置し、話し合いの手引きを基に学習が進められるよう工夫されている。「つながる・広がる」のところでは、他教科との関連が図られるようになっている。挿絵、写真、Dマークが効果的に掲載されており、児童が考える際のヒントになるように工夫されている。巻末には学習の振り返り、学習のまとめなどがあり、書き込み欄には罫線が引かれていて、児童が書き込みやすいように配慮されている。

次にG者である。こちらも全学年1冊ずつである。1年間で学ぶ道徳の全体像を確認できる見開きページが設定されており、教材が内容項目によってまとめられ、狙いも明示されている。巻頭に自分を見つめるページ、巻末に1年間の学びを振り返るページを設定し、児童が1年間の成長を感じ、これからの生き方を考えるように工夫されている。プラス思考、未来思考を備えた児童の育成を目指し、問題意識を生み出す仕掛け、活動の工夫、学びを広げるためのページなど、内容が工夫されている。いじめ防止につながる教材が多数用意されている。また、「いのちの教育」に関する教材が各学年で重点化されており、生命の尊さを通して他者を思いやる気持ちにつながる学習が期待できると思う。配列も直接的・間接的にアプローチができるよう、バランスよく考えられ、複数時間で扱えるように配慮されている。「深めよう」「つなげよう」「やってみよう」「広げよう」の4種類の学び方のページが設けられ、学習の充実と発展を図ることができるように工夫されている。自分たちの生活の中で起こり得る葛藤場面に対し、異なる複数の意見を掲示して比較させるなど、多面的・多角的に考えさせる工夫がなされている。児童が考えを深め、自分を見つめるきっかけとなる問い掛けを教材後半に記載したり、考えを書き込むスペースを設けたりするなど、多様な考え方を引き出す工夫がなされている。

次にH者である。こちらも各学年1冊ずつである。巻頭に「道徳開き」と「学びのガイダンス」、巻末に「学習の記録」と「1年間の振り返り」が設定されており、児童が1年間の学習をイメージしてから授業に取り組むことができるようになっている。多様な感じ方や考え方ができる教材を多く取り上げ、自分の考えを書いたり、友達と話し合ったりする活動を充実させることができるように工夫されている。生命を

尊重する態度、いじめをなくす態度、情報モラルを守る態度を育てることを重視し、発達の段階に合わせて発展的に指導できるように工夫されている。全学年を通してユニット、特に大切なことを設定し、生命を尊重する態度や人権を尊重する心が育つように配慮されているのが特長的だと思う。また、地域の文化、伝統に触れたり、地域のために尽くした人々や各分野で活躍する人物を多く取り上げたりすることで、児童の興味・関心を喚起するように工夫されている。重視したテーマについては、複数の教材を配置し、内容、項目を関連的・発展的に捉え、重点的な取り扱いができるように配慮されている。問題解決的な学習が展開できるようにもなっている。挿絵、写真が効果的に掲載されており、児童が考える際のヒントになるように工夫されている。見開きページには、必ず教材内容を考慮した写真や絵が掲載されていて、見やすいのはとても特長的だと思った。

教 育 長 加藤委員、いかがか。

加 藤 委 員 道徳を考えるときに、やはり答えが一つだけ誘導されていく、正しい答えに向かっていくわけではないというこの教科の難しさ、教えるときの難しさがあるなど思うのだが、そうすると国語とは違う、読み取りではないというところがこの素材と、それから発問のところでどう生かされてくるのかというのが大変試される教科なのだなと思った。

A者からである。基本的なアプローチは、まず何が起きているのかを考える、どんな気持ちでいるのか、登場人物の様子を考えるのを土台に、自分ならどうするかを考えていく、自分の心を見つめ直してみる、クラスみんなはどう考えたかを捉えるということが促されていく、これが基本的なアプローチとして通底している。素材文は、高学年であっても挿絵が入っても長過ぎず、コンパクトにまとめられていて、分量も扱いやすく、内容のバランスも良く、これもよろしいなと思った。ノートとともに、本文のいわゆる読み物には問いが書かれていないということが大きい特長だなと思った。そして、ノートに設定された問いがあることにより、何らかの問いに左右されることなく、個々が自由に読み物を読むことが可能となるのではないかと感じていた。「まなび」では、中心発問を含め基本的なアプローチに沿った問いが2～3問程度用意されている。自分の考えと友達の考えをそれぞれに分けて書く欄がある。話し合いの前の準備と、話し合い後の振り返りに使いながら、対話的な学びを深めていくのに役立つようになっていた。

B者。こちらでは基本的なアプローチとして六つの文章で書かれていた。自分で感じ、考えて、自分の意見を伝える。友達の意見をよく聞こう、そして次にいろいろな答えがあるよということを明確に書いてくれている。そして、みんなで考え、話し合いましょう、自分を見つめましょう、ノートに書きましょうという順序でアプローチされている。正しい答えや良い答えを見付ける時間ではないということ、それから自分を見つめ、自分自身の生き方を見付ける時間であるということを伝えながら、道徳科の枠組みを児童生徒に分かりやすく伝えていたと思った。素材だが、状況理解や心情理解を促すために配慮された素材文と、感じ方や気持ちを大事に取り上げようとする問いの組み合わせが印象に残った。その問いについても、小学校5年生の問いなどは3～4個あり、高学年については少し多い印象があるが、良い意味で具体的な問い掛けをしているように思う。問いの後に「学習を広げる」というコーナーがあり、本の紹介、また「この一言」「もっと考えよう」「活動しよう」「知っておこう」など、



関心を持った子どもたちはさらに自ら学ぶことができる展開の道筋も具体的に用意されている。また、「道徳ノート」の発問は自分を中心に考えるものになっており、いわゆる文章の読み取りではなく深い学びが期待できると思う。この別冊ノートは、内容領域に対応してまとめられているので、授業の進行に合わせて先生の指示で該当するページを開かせる必要がある。しかし、ノートにまとめるという作業によって、テキストの提示の順序ではなく領域のまとまりをより意識することができて、児童自身が授業内容を改めて領域ごとに整理でき、以前に取り組んだ同じ領域の授業とのつながりも意識できるなど、1年間が終わった後、その授業の蓄積を自分で確認できる効果があるのではないかと思った。

C者は、基本的なアプローチとして、「気づく」から「考える・深める」「見つめる・生かす」「話し合ってみよう」「動いてみよう」「書いてみよう」ということで、児童生徒にも大変分かりやすく述べられている。素材文は、編集委員会によるオリジナルの素材文が多いような印象があった。目当てにかなった内容が用意されていると思う。分量は適切で、「心のベンチ」は命、人権、いじめ、情報、防災等の領域をコンパクトに提示してくれている。特にいじめを扱った単元は、大変印象的だった。日常的な場面に起こるいじめエピソードをよく咀嚼して、題材化してくれていると思う。例えば3年生では一般的ないじめの定義と立場の違い、4年生では「遠足の朝」「なくそういじめ」「いじりといじめ」など、いじめのメカニズムを学年に無理なく提供している。5年生の「心のベンチ」では、いじめの傍観者を取り上げ、傍観者から仲裁者になることについて述べている。小学校6年生では法律との関係、あるいはいじめられる人に非はあるのかという、より深まった内容、テーマについて、そこで児童生徒たちに認知的な枠組みの変化、嫌いな人との付き合い方などにも触れて、深めてくれているように思った。問いは、最初に導入の問いが一つあり、また文末に「考えてみよう」のところで文の内容についての発問が一つと、「見つめよう生かそう」の問いが一つあり、計三つになる。この問いのセットが簡潔で明快だと思った。道徳科の問いは、必ずしも具体的で答えやすいものが求められているわけではないので、その問いに教師の添える発問が生かせるということでもあり、教師が目の前の児童の反応に合わせて働き掛けることができるということでもある。数が多ければいいものでもないので、使い方は現場に任されているなどと思った。

D者になる。基本的なアプローチは「話し合って考えよう」「読んで考えよう」「演じて考えよう」「書いて考えよう」「考えたことは毎日の生活の中で生かしていこう」となっており、こちらも児童生徒が読んで分かりやすい進み方になっていると思う。素材文は単元ごとの量が適切で、情報、モラル、いじめ、人権も各学年にバランスよく取り込まれていると思った。ほかに消費者教育、シチズンシップ、社会参画の教育、法教育など現代的な方向にも積極的に取り組んでくれている。また、問いだが、これも最初にその教材のキーノートが簡潔に提示され、最後に素材について2～3個の問いと、「あなたについて」という1個の問いが用意されている。ノートはないが、本誌の中に「学びの記録」というのがある。単元ごとなので実際の授業展開では毎回児童にページを指定して開かせなければならないところもあるが、自分自身の学びの記録を一覧できるということで、先ほど他者について申したようなところが、使い方によって子どもたちに大変、視覚的に1年間を確認できる機会を提供することができる。また、他教科とのつながりも明示されていて、扱いやすい大きさで、紙面の色も穏や

かで、読みやすいと思った。

E者である。基本的なアプローチは枠組みが児童に分かりやすく丁寧に示されている。「問いをもつ」「考える」「まとめる」「広げる」ということである。また、授業はどんな方法で進むのかというアプローチもわかりやすく紹介されている。そして、授業だけではなく様々な場面での生かし方のイメージ図、例えば「学校で」「家庭で」「地域で」も加えられている。これにより、児童生徒自身に分かりやすいように学習の目的と目標が示され、本の使い方、進行の枠組みが示されている。授業の中でそのときやっていることを意識付けするために、この部分に戻って使用するような使い方もできると思った。その後、「あなたはどんな人になりたいですか」とあって、生徒が無理なく入っていくことができると思った。また、小学校6年生では命を重点的に扱っている。問いは最初に一つあり、例えば「いじめはどうして起こるのでしょうか」「よい友達とはどのような友達だと思いますか」など、大きな目当てが問いの形で投げ掛けられており、文を読む途中に細かな問いや、テキストの感想、問いなどが挿入されていく。そして最後に2問、これにはいずれも文章内容の読み取りを書かせるものではなく、文章を読んだ上で考えてほしいことが問われており、本来的な発問の性質を有していると思う。ただ、途中の挿入発問を含め総合すると、問いの数は多めかもしれない。

F者になる。基本的なアプローチとして、これから1年間で学ぶことというのが内容、領域ごとにまとめられている。それを明示するような工夫をしていると思った。また、「気づく」「考える」「話し合う」「振り返る」「見つめる」「生かす」など、生徒にも明確で分かりやすく示されている。話し合いの約束がまとめられており、話し合いを進めていく、そのときのマナーを伝えるというのがこの者の工夫かと思った。また、加えてなりたい自分を最初にイメージさせていくということがあった。これらの枠組みが2年生以降の全ての教科書であらかじめ示されることで、生徒は道徳科に取り組む方法が理解できると思う。すなわち、これからの素材ごとに何を考えるかは学習者に任されていて、どのように自分が授業に取り組み、関与していくのかについては分かりやすいと思った。素材文だが、どの学年でも「いじめのない世界へ」ということで、特に焦点化されており、分かりやすいと思った。問いだが、1・2年生は文の最初に目当てに関わる問いが1つ載せられている。扱い方は教員の自由度が高く、工夫できる点だと思った。素材文に自分を十分に投入して考えさせることについて、少し工夫が必要となると思う。3年生以降は素材文に関する問いが一つと、自分についての問いが一つということになっている。巻末に学習の振り返りがついており、単元ごとにどれくらい考えたか、ほかの人から学んだかどうか、自分を振り返ったかどうかの面からチェックすることになっている。どうなればいいのかという目標が素材文の理解について示されているのではなく、考えることをしたかどうかということで、児童に伝えやすいメッセージとなっている。

G者である。基本的なアプローチは、内容は「私のこと」「あなたと私」「社会と私」「命や自然と私」という形で、内容が広がっていくということ、そしてその方法は「気づく」「考える」「見つめる」ために「話し合おう」「やってみよう」「書いてみよう」なのだということ、こちらも大変分かりやすいと思った。「自分のことを書いてみよう」というところでは、今の自分を見つめ、自分を見直す意識付けがあつて、授業に導入されていく。その後、領域ごとに目次が書いてある。児童自身が1年

間の内容を領域の面からあらかじめ概観できるところがいいなと思った。素材文の分量は適切で、テキストが大判なので1素材につきページ数が少なく、全体が見やすく、概観しやすく、注意を向けやすいレイアウトになっていると思う。また、その時間で取り上げる素材がどのカテゴリーのテーマなのかについて、児童自身が把握しながら進めやすいと思う。「私」から始まり、「私」を取り巻くさまざまな関係性への意識を高め、素材の状況を関係性から具体的に想定するためのわかりやすい道筋になっていると思った。いじめを正面から言葉にして取り扱っているというアピールは少ないが、「いのちの教育」あるいは「社会と私」などでいじめのことについても大きな位置を占めており、内容的にしっかりと扱っていると思う。問いは簡潔で、コンパクトな2つの問いである。問いの内容もよく練られていると思った。その他、挿絵や写真が大判な分、大きくふんだんに用いられていて、生徒の注意をそらさないと思う。但し、ちょっと1年生には大きいかなという懸念はあった。

H者である。基本的なアプローチは、「気づく」「考える」「深める」「つなげる」ということを児童生徒に明確に示している。素材文は、分量は長過ぎず、適切で、心情が伝わりやすい記述が多いと思った。「命の尊重」「みんなと仲良くする」「情報モラルとスキル」に関するテーマが各学年に無理なく組み込まれている。单元ごとに目当てが過不足なくコンパクトに示されており、導入に適していると思った。「とりどり先生」というキャラクターが導入とまとめの一言に登場してきて、適切だと思った。「やってみよう」で取り上げる内容や場面も、日常生活によく生じる大事なスキルを取り上げており、シナリオ提示による疑似体験や、クラスでロールプレイをして確かめ合うのに有効と感じた。「補充教材」は自主学習にも適していると思う。問いは、学年に関わらず3問～5問で、問いの数は多めで、教材理解のための設問もやや多いが、生徒が十分に素材文に入り込むことを重視しているように思った。文字、色彩が穏やかで、美しい教科書だと思った。

教 育 長 中村委員、いかがか。

中 村 委 員 A者である。「きづき」と「まなび」という2冊で構成されており、読み物の「きづき」を読んだ後、ノートである「まなび」で自分の考えを整理し、より深く考えられるように工夫されていると思った。また、「まなび」の中には学習内容に沿った人物のコラムや写真などが示されている。全学年に「ともにいきる」という題材を設定して、いじめをなくし、人と人との関わりについてもより深く考えられるような設定になっている。また、今日考えなくてはならない課題である情報モラルについての教材もあり、子どもたちに身近な問題を考えさせるようなきっかけになると思った。

B者である。本編とノートの2冊で構成されている。ノートは書く部分が多く、自分の考えを整理し、自分の言葉で伝えることで充実した言語活動ができるようになっていると思う。「考えよう話し合おう」では学習の道筋が示されており、学んだことを自分のこととして深められるような工夫がされている。「道徳ノート」には、各単元の回答のほかに感じたことや考えたこと、また「話し合い活動の記録」、そして「心に残っている授業の記録」などがあり、各活動に重点を置いていると思う。そして、自分自身で考え、自分自身の言葉で伝えられるような言語活動ができるようになっていると思う。また、自分や生命、人との関わり、社会との関わりなど、隔たりなく配置されていると思った。

C者である。こちらも本編とノートの2冊で構成されており、ノートはこちらも書

く部分が多く、自分の考えを整理し、充実した言語活動ができるように工夫されている。「心のベンチ」では、学習した内容に沿って考えを子どもたち自身が深められるような工夫がされている。「見つめよう 生かそう」のコーナーがあり、自分の考えをより深くもう一度見つめる、そういった機会がここで得られると思った。生命、自然、伝統、文化、スポーツ、情報化など、隔たりなく配置されていると思う。また、安全の暮らし、それから人との関わりというところで、こういったところに重点を置かれたものになっていると感じた。

D者である。「考えよう・話し合おう」「つなげよう」で自分自身の考えを深め、対話的な学習につなげられるように配慮されている。「いじめを許さない心」の教材を配し、いじめについて考えられるように配慮されている。全学年を通して表紙の裏に「みんな生きている みんなで生きている」というものを掲載し、6年間を通して大切にしたい内容が伝わるように工夫されている。人や社会に関わる教材が多く取り入れられており、子どもたちが社会の一員であることを意識できるものになっている。また、「コラム」があって、学んだ内容に沿ったものになっており、より深く、そしてより広がりのある考えに至る工夫がされていると思った。

E者である。「学びの足あと」で毎時間の振り返りができるように工夫されている。単元の終わりの発問は、量が適度で、一つ一つを深く考えられるように工夫されている。また、4・6年生にはパラリンピック、5年生でオリンピックの内容を取り上げており、子どもたちが関心を持ち、広い世界に目を向けられるような工夫がされていると思った。「ことばのたからもの」のページでは、ことわざや論語なども紹介されている。命の大切さや人権尊重など、思いやりの心を育てる教材が多く掲載されていた。

F者である。全学年で「いじめのない世界へ」と題して、いじめについて発達の段階に応じて考えられており、「いじめを許さない心」が育つように工夫されている。また、単元の終わりの発問の量が適度で、一つ一つが深く考えられるようになっている。各学年に合った情報モラルを題材にした教材が扱われており、子どもたちが身近な問題として考えられるようになっている。巻末に「つながる 広がる」という付録があり、伝統芸能やスポーツ選手、世界で活躍している日本人を紹介し、興味・関心を持って広い視野で国内外に目を向けられるように工夫されていると思った。

G者である。「いのちの教育」に重点を置き、各学年でテーマを設け、生命の尊さの学びを通して思いやりの心を育むという配慮がある。東日本大震災や仙台出身のスポーツ選手を取り上げた教材があり、子どもたちが身近に関心を持って学習できるように工夫されている。また、「やってみよう」「つなげよう」「広げよう」「深めよう」を通し、言語活動が充実し、自分の言葉で考え、そして話すことで、主体的・対話的な学びができるように工夫されていると思う。

H者である。命や人との関わりに関することに重点を置いて、思いやりの心を育むような配慮がある。東日本大震災に関する教材があり、子どもたちが身近に関心を持って学習できるように工夫されている。「考えよう」「深めよう」という発問で、学習内容に関する発問があり、その後に「つなげよう」として子どもたちが学習内容を日常生活に生かすことができる工夫がされていると思った。

教 育 長 里村委員、いかがか。

里 村 委 員 A者である。ほかの方からも出ていたが、特長の一つは2部構成。「まなび」と「き

づき」となっているが、これは問題意識を持たせて、その後、道徳的な価値をよく理解させる、そういう仕組みとして、あるいは教育効果を高める仕組みとして、非常に優れた着想だと思う。それから、もう一つA者の特長、いいと思うところは、人との関わり合い、ここにかなり重点を置いた教科書になっていて、そういう点でも全学年を通じて「ともにいきる」ということに非常に重点を置いており、今の時代とても大事なことだと思う。

次にB者は、一言で言うと内容が素晴らしいと思う。道徳的な教科書として秀逸だと私は思う。それから、もう一つは児童に答えを先読みさせないような工夫がされていて、特に中高学年ではあえて内容項目には触れずに、読ませて、そして自由な意見を書かせるという設計になっている。ここも一つ素晴らしいことだと思うし、あと別冊を見ることによって保護者が児童の成長を見守ることができるのではないかという思いである。一言で言うと、内容は秀逸と私は思う。

C者だが、この者は児童に考えさせることを誘発させるということを重点に置いている。その意味で充実した学習が展開されるのではないかと思う。それからもう一つは、友達の考え方を知るということで、自分の生き方について自省するというか、深めることができるようになってきていると思う。少し残念なことは九州と東北の引用が少ないが、全体的に地域別の教材が整理されているというところがいいと思う。中には私の非常に気に入った物語がいくつかあった。

D者である。特長はというと主体的な学びと対話的な学び、この二つをきちんとやるという意図でつくられた教科書だと思う。体験的な学習とか、問題解決的な学習、それがよく整理した形で工夫されていると思う。それから、他者との比較で言うと、カリキュラムマネジメントにつなげるような構成がよくできている。1年間を例えば3、4年生では、「たがいにみとめ合うって?」「人や社会に目を向けるって?」「自分を伸ばすって?」というふうに三つに分類してできているが、これはカリキュラムマネジメントにつながるのではないかと思う。

E者だが、ここは道徳の目標達成のために問いをきちんと明示して、子どもたちに考えさせるということを狙った、そこに特長があると思う。それから、同じだが問いを持つということの問題意識を持たせて、その後まとめたり広げたりということで、子どもたちに教えを広げていくような教科書だと思う。それから、下段にはキャラクターを通じていろんな感じ方とか考え方が実感できるように配慮されていて、どなたかおっしゃったが道徳は多様な考え方を理解することが大事で、一つしかない正解を求める教科ではないというところを、こういうところで表しているのではないかと思う。

F者である。ここは特に他者とのコミュニケーション、児童同士の交流に力を置いた教科書ではないかと思う。「つながる広がる」の欄を通じて、他教科との関連も学ぶことも含めていて、道徳を学びながら、コミュニケーションの勉強をしたり、あるいは他教科との関連をつなげさせるようなところに特長があろうかと思う。「いじめのない世界へ」というページを設けて、その点については我々の教育振興基本計画のミッションにも合っていると思う。

G者は、学び方のページを活用して、多様な学びを展開していくようによく編集されたものだと思う。「深めよう」「つなげよう」「やってみよう」「広げよう」という言葉であるが、ここは道徳の授業で非常に大事なポイントであると思う。それから、

G者のもう一つの特長は「いのちの教育」に非常に重点を置いているところだと思う。他者と比べて縦長で大判なだけに、写真や絵が大きくて、児童にとって容易にイメージを膨らますことができる教科書ではないかと思う。

H者である。ここの重点は、3色で色分けしてあるが、「生命を尊重する」「いじめをなくす」「情報モラル」ということで、ある意味今の時代に合った分け方なのかもしれないが、そここのところが特長と思った。それから、「補充教材」を多く設けていて、それぞれの学校の実態に応じて指導ができるようになっている。学習の狙いを明確にするために、教材ごとの導入の問い掛けがあり、それに対して問題解決的な学習が可能になるように書かれていると思う。

教 育 長 吉田委員、いかがか。

吉 田 委 員 考え、そして議論する道徳が提唱されているように、道徳の時間は教材を通して自己の考えを持ち、そして発表し合い、違いを知り、新たな発見をして、社会人として自己の確立を目指すというところにあると思っている。そのような点で、児童に考える機会があるのか、議論できる内容になっているのかという視点から、この教科書を見させてもらった。

まず、掲載されている教材に対する向き合い方である。それぞれの教材に触れる前に、読み取りに課題を持って臨むかどうかという点で、教材の題名だけを示して、課題に縛られず、フラットな気持ちで臨ませようとしているのがA者、G者かなと思っている。テーマやそれに関する児童への問い掛けで、見通しを持たせて臨ませようとしているのがその他の者と受け止めた。教材名のほかにテーマ等を設定する、またしないで先入観を持たせないままに授業に入り、授業展開の中で内容項目に気付かせるというやり方もあるが、どちらが良いか、議論の対象になるところかと考える。私は教材内容に一定の見通しを持たせて、要旨解釈にスムーズに入れるようにすることが望ましいと考えている。

続いて、児童に対する発問の扱い方である。教材の中で、児童への補助的発問を設定しているのがE者で、資料内容によって本文中にも設定しているのがD者である。そして、これはノートの関係だが教材の後段に学習の手引き等のコーナーを設けているのがA者、補助的な発問と中心発問で構成されているのがB者、D者、G者である。中心発問だけを掲載し、補助的発問は学級の実態を踏まえながら授業者が考えるようになっているのがC者、E者、F者、H者である。そして、A者以外は全て生活を振り返る等の発展的な発問を設定している。この後段の発問数においては、特に補助的な発問についてはやはり学級の実態をよく知る授業者がつくるという視点で、ある程度精選されたものの内容がふさわしいのかなと考えているところである。さらに、考え、議論するためにも、その時間が必要に思う。

そのためには、教材の読み取りのための時間というのはあまり掛けないほうがいいと思っている。その点で、教材の分量、読解の難易度を考えなければならないと思う。この観点から、1学年の物語資料について見た場合、言葉を捨象し、要旨を中心に編集し、読み取りに時間を掛けないように配慮しているのがC者、次いでF者、さらに次いでG者、H者という印象を受けた。このことについては、他の学年への編集方針にもある程度関連すると思っている。また、C者は教材の初めに教材文のプロローグ的な文章を設置し、また主な登場人物の紹介でスムーズに教材の内容に入れるような配慮をしているところもある。

そして、いじめに関してである。確かにこのことについてはあらゆる機会を捉えて指導しなければならないと思うが、1単位に時間を掛けて指導することができるのは道徳の時間であると思うし、そこそこが大切なと受け止めているところである。条例、いじめ防止基本方針だけでなく、子どもたちの内側から教科としての道徳の授業を通していじめをなくすということを醸成していかなければならない。その点で、各者ともいじめに関する教材を取り扱っているが、いじめというテーマをあまり明記しない者、それから間接教材を中心に編集している者、直接教材と間接教材で構成している者、目次に明記し、児童の意識化を図っている者等、さらには配列の時期に配慮している者など様々だが、仙台市の状況を考えると児童にも確かな意識を持って臨んでもらわなければならないと考えている。そういう点で、教科書にしっかりと位置付けを図っているという印象を受けたのがC者、D者、E者、F者である。

そして、仙台市の生活・学習状況調査で、携帯電話、スマホ、インターネット、アプリ等に関して、つまりその情報モラルに関することが毎年話題になっている。このことについても、小学校で単位時間を取って指導できるのが道徳の時間である。そのような点で、全ての者で触れているが、特に編集に配慮されているという印象を持ったのがA者、C者、D者、E者、F者であった。

最後になる。先ほども質問させてもらったが、別冊ノートについてである。A者、B者、C者が準備されている。やはり児童と教師が授業をつくっていくという観点からすれば、それはノートにも言えることかなと思っている。もし準備されているノートを使用するとするならば、中心発問と自由記述というコーナーでつくられているC者がその範疇に入るのかなと思っている次第である。

教 育 長 皆様方から発行者8者の特長についてそれぞれご意見をいただいた。8者なので、絞り込みを行っていききたいと思う。ご自身が推薦する3者について、ご発言をいただきたいと思う。

花輪委員から願います。

花 輪 委 員 私は、C者、D者、F者の3者を推薦する。

阿 子 島 委 員 私もC者、D者、F者を推薦する。

加 藤 委 員 3つということでは、C者とF者とG者だが、素材の内容から考えるとどうしてもD者を排除できない。

中 村 委 員 D者、E者、F者である。

里 村 委 員 B者、D者、F者である。

吉 田 委 員 C者、D者、F者である。

教 育 長 集計すると、A者が0でB者が1、C者が4、D者が加藤委員が外せないとおっしゃったが、これを含め6、それからE者が1、F者が6、G者が1、H者が0ということで、C者とD者とF者の3者について、さらにご議論いただき、絞り込みを行っていききたいと思う。

具体的に議論する前に、この3者について改めてこの時点で確認したいこと、あるいはご質問、ご意見、事務局に確認したいことは、あるか。

(質疑なし)

それでは、これまでの議論を踏まえて、このC者、D者、F者の3者について、最終的に1者に絞り込むわけだが、皆様方からどの発行本がよろしいか、ご発言をお願いしたいと思う。

里 村 委 員 事務局の方にお聞きしたいが、小学校というのは道徳という先生はいらっしゃらなくて、いろいろな先生が道徳を兼ねてやっていたらという理解でよろしいか。そして、週に何コマぐらい持っているのか。そして、多くの先生方から寄せられている声として、これからの課題というか、どんなことが声として上がっているか。

指 導 主 事 お答えする。年間、1年生は34時間、2年生から6年生までは35時間、指導することになっている。週当たり1時間という考え方になっている。

それから、「特別の教科 道徳」という名前になっている由来は、道徳専門の免許がないということで、ご指摘のとおり誰でも教えることができる、逆に誰でも教えられなければならないということになっている。

最後に課題というか、現場からの声についてだが、道徳の教科書を使った授業というのが昨年度からスタートしており、それぞれの学校で独自の、今のご議論の中にもあったが児童の実態に応じて、どこを重点項目にしたらいいかとか、どこを中心発問にしたらいいかという自校化のところは今力を入れているという声が届いている。

教 育 長 ほかにないか。

(質疑なし)

事務局が説明したように、特に専任という取り扱いではなく、各担任、全ての教員が道徳を教えなければならない。また、ほぼ週1時間を道徳の時間に充てるというような取り扱いということなので、この点も考慮しながら、最後の絞り込みになろうかと思う。

里 村 委 員 では、もう一つ願います。今教えていただいたことを念頭にではあるが、道徳の場合は教科書に書かれている物語がものすごく大きなウェイトを占めると思う。私の場合は、いろいろとこの仕組みのことはよくわからないが、どの教科書が道徳の教科書として内容が優れているだろうかという1点で三つを選んだ次第である。その辺の考え方を教えていただきたい。道徳はここに出ている物語によって、やっぱりずいぶん違うし、先生方は自由とはなっていたが、自由だからこそ書かれている物語の位置付けが非常に大事ではないかということである。だから、ほかの委員の方にもお尋ねしたいが、どういう枠組みができていとか、そういうことも大事だと思うが、書かれている物語についての大切さというのはどのくらいご自分でウェイトを置いて選ばれたのか、その辺のところをお聞きしたいと思う。

教 育 長 里村委員から評価に当たっての素材のウェイトとか、ご自身の位置付けだとか、そういうご質問があったので、どなたでも結構だご発言いただきたいと思う。

事務局に私から質問するが、1時間の授業の中で、小学校だと45分だが、その授業の中で、単元によって違うのかもしれないが、素材の読み込みに掛ける時間というか、その後児童同士、あるいは先生と児童の意見の出し合いというのがあると思うが、読みこみと、理解するために、素材にどのくらい時間を掛けるのか、という点については、どのような1時間の授業の進め方なのか。ものによって、単元によって、素材の深さ、分量によって違うかとは思いますが、ある意味標準的なというか、スタンダードな姿を想像して頂き、お話ししていただければと思う。

指 導 主 事 今のご指摘のとおりで、一時期、道徳の時間は読み取り道徳という批判もあって国語とどこが違うのか、文章を読んで正解を求めるものではないかというのが今回の改訂の背景の一つにある。多様な指導ということで、例えば動作化という手法がある。役割分担をして、そのとき登場人物は一体どのような気持ちだったか、そこから自分



の考えを深めていく、道徳的価値を理解させるための体験的な活動である。先ほどの分析の中でもそれぞれの教科書でそういうところを扱っているというご指摘があったとおりで、今は多様な指導が求められている。基本的に道徳的な諸価値の理解を通してというのが基本なので、まずは教材に関わる諸価値の理解がベースとなるため、そのために、読んだり考えたりという時間はとっているというところがある。

教 育 長 先ほど里村委員からお話もあった、各委員の皆様方の素材のウェイトだとか、教科書における意味付け、位置付けという点ではどうか。

吉 田 委 員 答えにならないかもしれないが、私が教科書を見させてもらったときに、各者ともやはりそれぞれによりふさわしい教材を選んでいるなという印象を受けた。例えば1年生でも4年生でもそうだが、どの者にも載っている物語文がある。「やっぱりこれは外せない」ということなんだろうと思う。だが、そのほかの内容項目については「やっぱり私たちが拾ってきた素材、それを使って子どもたちに訴えよう」というように、違いがある。だから、その内容よっての違いというのはあまりなく、それぞれに工夫しているなという印象を受けた。したがって、そうなってくると今度この教科書を持ったときに子どもたちは授業としてこれらをどうやって自分の体の中で活用していけるのかなという視点から見たときに、やはり構成であったり、それから発問例であったり、配列であったり、というところでの違いというのを見ていった。あくまでもこれは授業で使うもの、読み物じゃなくて授業で使うものであったらばどうなのかという視点からこの教科書を見させてもらった。したがって、先ほど言ったように、考える、それから話し合う、その素材としての教科書はどんなのかということで、先ほどの3者を選ばせてもらった。

花 輪 委 員 私も結論から言うともあまり考えなかった。実は私は4年生から6年生まで、各者はどういうテーマからその素材を選んで構成しているかというのを全部調べた。かなり違う者があるが、例えばA、B、C、D、4つのテーマがあると、Aにいくつ、Bにいくつ、Cにいくつというのを4年生、5年生、6年生で調べて、この者はどういうところに力を入れているのかなというのを調べた。例えばある者はAにすごく教材を配置しているとか、ある者はCにかなり素材を配材しているなというのはあった。ただ、私が実際に読んでみて、私はその素材をどのように料理できるかということにこそ、先生の裁量があるととらえた。その素材の内容を自分のクラスだとか今置かれている状況だとかに反映して、裁量でどのぐらい議論させられるか、そういう意味で使いやすい教科書はどれかなという観点で選ばせてもらった。

教 育 長 ほかにこの件についてご意見をお持ちの方、お願いします。

加 藤 委 員 今のお二人とほぼ同じである。ただ、先ほど三つ選んだが、さらに素材の内容から加えたD者だが、やはり道徳を学ぶときには素材は本来、葛藤課題、どっちにも意味があるとか、どちらも正しいところも難しいところもあるという意味で、どちらも取りにくい、一つだけ取り上げるのではない分りにくさというのが本来の授業のテーマになるのだと思うが、それが素材として生かされていたのがD者だと私は思った。しかしながら、これを例えば評価しなければならないことを考えたときに、そういった構成、それから参加して、実際に先ほどは動作化とか体験とおっしゃられたが、そうしていくときに相当これは質的に深い、高い分、授業にばらつきも出るかもしれないなという意味を持って、迷った。素材としては、私はD者はかなり高いものがあると思っている。そして、授業の中で構成を持って子どもたちと安心して進めていく分

には、ほかの3者が使っていきやすいかなと思った。

教 育 長 里村委員からの問いをいただいて、今事務局あるいは各委員間で意見を交換したところである。

改めて3者の中から絞り込みをしていきたいと思う。どなたか、1者ということでご推薦いただければと思う。

花 輪 委 員 私はF者を推薦する。理由は、C者もD者もF者も大変いい教科書だが、先ほどから繰り返しているように教員の裁量というか、この素材を使ってどのようにクラスで議論できるのかという観点から考えたときに、C者もD者もちょっと教科書自身の観点がでてきているなという印象を受けた。なおかつ少しバラエティーに富み過ぎているのではないかなと。特にC者は、実は単元の数38ぐらいあって、別冊ノートもあって、そのノートもいろいろな素材が入っていて、その素材をこなすのが大変かなと思う。D者は大変いい、扱いやすい教科書だと思うが、最後の問いが毎回ちょっと違った観点から問うているような印象を私は受けた。F者は、もちろん問いの内容は違うが、「考えよう①」「考えよう②」だけであって、そういう意味から素材を使って先生方が自由に自分のクラスの実情とか学校の実情とかに合わせて使っていける教科書になっているのではないかなという観点から、私はF者を推薦したいと思う。

教 育 長 F者推薦という発言があったが、そのほか皆様方からご意見をいただきたいと思う。

里 村 委 員 今、教員の裁量という言葉が出たが、仙台市の教育委員会として道徳について教員の裁量をどのくらい容認する考えにあるのか。もう少し言えば、道徳という専門の先生がいない中で、自由裁量を広げるということは、学校ごと、あるいは先生ごとのばらつきが大きくなる。その大きくなるばらつきについて、何のコントロールもせずに容認しようとしているのか。

花 輪 委 員 裁量という言葉を私はどのように使ったかというのと、この題材に対してどういう観点から話し合っていこうかということ、教科書に指示されているのが少ないほうがいいのではないかなと思った。そういう意味の裁量なので、全くこの素材を使わないで、全く別な素材でやろうという意味ではないということをご理解いただきたい。

里 村 委 員 それを理解した上での質問である。裁量というのは自由度がある。どれがあっても間違いじゃないということだと思う。けれども、裁量が大きければ、ブレは大きくなる。だから、道徳という専門の先生がいない中で、教科書を使いながら、学校ごとにどこをどのように使うかということについて、何のコントロールもないのかというのが質問である。各学校、各先生の裁量を任せて大丈夫なのだとすることであれば、何をもって大丈夫だと思っているのか。その点についての質問である。私は道徳に限らず授業においては、各先生にできるだけ裁量を持たせたほうが良いと思う。しかし、道徳の持っている性格上、仕組み上、専門の先生がいないわけだから、そうすると裁量という枠を超えて、脱線する授業も出てくるのではないかな。その点について、やはり教育委員会として、ある程度脱線しないルールを示さなければいけないと思うが、それはどういうお考えなのかというのが質問である。

指 導 主 事 ご説明する。道徳の内容項目、先ほど価値項目という話があったが、国のほうで小学校1・2年生は19項目、3・4年生は20項目、5・6年生は22項目と項目数が決まっている。授業時数は1年生が34時間、2年生～6年生は35時間なので、それぞれの項目にその学校の重点事項を決めて、ここの内容は繰り返しやったほうが良いなという場合は繰り返し入れて、それぞれの時数の年間指導計画を作成することにな

っている。系統立てて考えていく教科、道徳だけではないが、場当たりの指導等にならないように、学校全体、校長のリーダーシップのもと、きちんと年間指導計画を立てて授業を進めるようになっていし、このことに関する確認も教育課程係で確実にやっている。

里村委員 そうすると、裁量幅が大きいということは議論の対象にはならないのではないだろうか。

花輪委員 先ほど中心設問と補助設問とあった、それをたくさん教科書とかノートに書いてあるよりは、非常に本質的な問題、設問を数少なく書いておいて、それをもとに議論して議論を発展させて、クラスごとに違う設問をやらせたほうがいいのではないか。あまりにも教科書の中に微に入り細に入り設問をくっつけるのはいかがなものかという意味である。

吉田委員 私もできるだけ教科書の中に補助質問とかヒントとかはないほうが、この教科書の特性からしていいのかなと思っている。いわゆる内容教科である「社会」とか「理科」だといろんなものを知らなければ次の発展的学習ができないが、これは内容教科ではないので、とにかくこれを素材にしてみんなで考えて、まとまらなくても新しい発見をしてという繰り返しの中で道徳的な価値について知っていく、気付いていくというのが特徴であると思う。したがって、いろんな発問が準備されていると、発問に則って授業を進めないと子どもたちは違和感を覚える。教科書に載っているのになぜ先生は取り上げていないのと。そうではなく、本来学級の実態があるから、先生がその実態に合わせてこういうような言葉であれば子どもたちは理解して反応を示してくれるのではないかと、そういう積み上げの中で最終的にはやはり中心発問というのがある、これはこの内容項目からして欠かせない発問になる。そこは教科書に掲載されていてもいいのかなと思う。より中心発問、発展的発問ということで構成されたほうが、授業者と子どもたちがともにつくり上げていく授業になるということ、花輪委員も言っているのかなと思うし、私はそれに賛成したいと思っている。

だから、具体的なことを申し上げるとC者もとってもいい。私も外したくない気持ちがある。特に「心のベンチ」というのは、各内容項目をさらに補充・進化させる内容になっていると思っている。それから、D者もコラムという位置付けがいいし、さらに加藤委員が言ったように物語を完結させないところが結構ある。要するにこれは葛藤である。あなたが考えてと。でも結論は出ないかもわからない。結論が出ないところに意義があるのかなと思っている。さらにF者の場合には、そういうことはあまり手だてがない。手立てがないゆえに、みんなでつくっていかなければならない。という印象であり、本当にそれぞれによさがあるのだが、あえてシンプルなところの良さということで私はF者を推薦したい。

里村委員 今のお二人のご意見、すごくよく分かった。できれば教科書のどこを見てその差があるということ考えたか、教えていただきたい。

吉田委員 編集されているところ、要するに教材の最初の段階。途中もあるが、後段のところに学習の手引き的なところがある。そこを見て話している。だから、学習の手引きのところいっぱい、または途中にいっぱい発問例があると、それに縛られてしまう、拘束されてしまう、そういう可能性もあると思っている。

加藤委員 内容について全く問わないわけにもいかない。みんなが共通の内容を土台にして、そこから考えるという意味では、「みんな分かったかな」ということを押さえなけれ

ばならないので、そこも必要なのだが、そこが多過ぎないほうがいだろうと、文章の読み取りにならないほうがいだろうということで、私もその点では賛成である。

それで、道德の葛藤課題という意味では、F者は割とこうなっていてほしい、こうなるといいなという価値が分かりやすい素材になっているかなと思った。D者で最後まで私が迷っていたのは、吉田委員がおっしゃったようにちょっと不穏なものが巻き起こるのである。どうなのだろう？子どもたちの中でどっちが正しいのだろう？でもこういうこともあるよね、ああいうこともあるよねという、つまり文章の中に終わりが無いというか、途中で切られてしまったような感じが残る、でもそれこそがいろいろ考えてみようという素材。ただ、そこが授業の最後まで考えたときに例えば二つに分かれてディベートができるのかどうかといったように、授業で扱うときの難しさが残る。

教 育 長 小学生というレベルで大丈夫ということか。

加 藤 委 員 そうである。

教 育 長 これが高校生とか大学生だったらいいということか。

加 藤 委 員 だったらちょうどいい。小学生の発達の段階では、かなり「こうあるべき」という道德観念を持っていくような段階にあるので、その中で答えが出ないことにいろいろ不穏なものが残ってしまう可能性も考えた。ただ、本来の道德教育というのはいこうあってしかるべきで、このところで十分に討論してほしいというような気持ちが残ったので、そこが一番難しかったところである。

残る2者、私が挙げたのはF者とC者だったが、全くどちらも本当に甲乙付けがなかったところがある。F者の中で、十分に動作化、体験化が図られたときに、できるだけ子どもたちの様々な声をむしろ拾っていくような形で授業が展開されていくときに、F者というのが非常に生かされていくのではないかなと思うので、F者を推薦する。

中 村 委 員 私もF者を推薦する。やはり発問のところはD者もF者もとても少なく、子どもたちに考えさせるのにはとてもいいと思っていた。F者もD者もそうだが、大体二つか三つ、そして内容に関すること、そして自分に置き換えることという点で、どちらも同じような感じである。それはC者も同じような感じだったが、やはり私は「いじめのない世界へ」というところをきっちり謳っている、そして今のこの仙台においてはそういったものを目で確認する、子どもたちの目に触れさせることも必要なことなのかなというのがあって、F者を推薦する。

阿 子 島 委 員 私も全体的に見せていただいて、最終的にはF者がいいという感想を持った。まず、C者は「心のベンチ」というのが書いてあるのがとても大きかった。これもやはりいじめや命について取り上げていて、とても重要な課題だと思った。また、別冊に道德ノートというのが付いていたので、最初はノートが付いているのがいいのかと思ったが、あまりにも書く欄が多くて、1時間の中にほかの授業とか話し合いをして、ここで自分の意見を書くまではたぶん難しいのではないかととらえた。その点、F者は単元が終わったところにいろいろ少しずつ自分の意見を書いていくところがあり、最終的に授業が終わっての振り返りで書く欄がある、そういうのも意外と子どもたちにとっては使いやすいのではという印象を受けた。

教 育 長 F者という意見が多く出ているが、よろしいか。

(異議なし)

それでは、道徳については皆さんのご意見をいただいて、F者ということでまとめたいと思う。本日さまざまご意見をいただいたものを事務局で整理していただいて、26日の教育委員会で最終的な決定に持っていきたいと思う。

それでは、10分ほど休憩して、5時50分スタートとする。

(休憩 午後5時40分～午後5時50分)

教 育 長 それでは、協議を再開する。

#### 【一般図書】

教 育 長 次は一般図書についての協議である。

初めに、事務局から説明をお願いします。

特別支援教育課長 それでは、特別支援学校小学部・中学部、それから小学校・中学校の特別支援学級で使用する一般図書及び文部科学省著作教科書について説明する。

初めに、別紙資料1、仙台市立義務教育諸学校教科用図書協議会報告書をご覧ください。

この資料の20ページ目に続いて綴じられている別紙2というものがある。別紙2は、令和2年度使用学校教育法附則第9条の規定による教科用図書（一般図書）及び文部科学省著作教科書（小学部用・中学部用）一覧というものになっている。こちらの中身であるが、これは教科用図書協議会において示した令和2年度に特別支援学校の小学部・中学部、あるいは小学校・中学校の特別支援学級で使用する一般図書及び文部科学省著作教科書の採択候補を一覧にしたものである。

中身の表をご覧くださいと思う。この表の見方であるが、通し番号の右の行に「種目」という用語があるが、これは通常の学級の場合の「教科」と同じ意味で使われているものである。

また、種目欄に例えば「生活／外国語」など2つの種目が書かれている図書がある。これについては、「生活」の教科書としても、あるいは「外国語」の教科書としても使用することができるという意味で表している。

さらに、その右隣に「R2表示番号」という欄があるが、ここに書いてある「小」は小学部・小学校を表しており、「中」は中学部・中学校を対象にした図書であるということを表したものである。さらに、この「小」「中」の後に数字が書かれているものについては、宮城県教育委員会が選定した図書であるということである。一番下のほうにあるようにアルファベットが書かれている図書があるが、これについては宮城県教育委員会が選定した図書ではなく、これに加えて仙台市が独自に候補とした図書であるということを表している。

教科用図書協議会においては、この資料の表紙の部分であるが、1枚目の報告書の2にあるとおり、「採択方針、採択基準から見て適切であると判断する」との報告をいただいている。

さらに、資料にはないが教科用図書協議会において委員から出された意見としては、例えば新規採択本の「はっけんずかん どうぶつ」は、「仕掛けが多いだけでなく、イラストや写真を効果的に掲載していたり、具体的に大きさを数値等で表していたりするなど、イメージしやすくなる工夫がされている」などというように、それぞれの

本についてご意見をいただきました。

また、文部科学省著作教科書については、例えば「情報が多過ぎないため、子どもが混乱することがなく、学びやすいのではないか」「想像しながら学びを進めていくことができる」、あるいは「全体的にすっきりして見やすいつくりとなっている」「量的にもよく考えられているため、いろいろな障害のある児童生徒にも取り組みやすい教科書となっている」などのご意見をいただいている。

では、次に別紙資料5、令和2年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書にかかわる資料3 特別支援学校及び特別支援学級 調査研究委員会報告書をご覧いただきたい。

こちらの資料については、教科用図書協議会に先立って行われた調査研究委員会から出された報告書である。この報告書を資料として、協議会において協議が行われている。

この資料の1ページ目には小学部・小学校用の令和2年度の一般図書候補本のうち、今回新たに採択候補とした図書が掲載されている。1ページ目にある新規採択候補の図書のうち、64番、65番については「生活」、それから道徳の2種目で採択候補としていることから、それぞれの種目としての所見をそれぞれ2カ所に掲載している。また、18番の図書は昨年度「生活」として採択したものであるが、今年度、これに加えて小学校5・6年生の「外国語」としても新たに採択候補としたものである。同様に、37番の図書についても「国語」に加え道徳でも新たに採択候補としたものになっている。

各図書の対象ごとの評価、真ん中に○や◎などが示されている欄だが、どの本についてもいずれかの欄に◎や○の記号が示されており、それぞれ教科書として使用することが適しているという所見が挙げられている。

次に、この資料の2ページ目であるが、2ページ目から6ページ目までは今年度までに既に採択されており、令和2年度も継続して採択候補としている図書である。こちらについても、それぞれの評価がいずれかの欄に◎あるいは○が記載されている。

7ページ目をご覧いただきたい。表が2つあるが、こちらの上段のほうは発行者が増刷する見込みがないために、供給不能となった図書である。また、下段は内容が古いなどの理由によって宮城県教育委員会が教科書図書選定資料から外したものになっている。

続いて、8ページ目からは中学部・中学校用の図書となる。こちらには今回新たに採択候補とした図書2冊を掲載している。それぞれ評価がいずれかの欄に◎または○の記号が示されており、適しているという所見が挙げられている。

次に、9ページ目から11ページ目までは、今年度までに既に採択されており、令和2年度も継続して採択候補としている図書である。これらについても、同様にいずれかの欄に◎あるいは○が記載されている。

続いて、12ページをご覧いただきたい。こちらは発行者が増刷する見込みがないために、供給不能となっている図書である。

さらに、13ページ目からは文部科学省著作教科書になっている。13ページは小学部・小学校用、14ページは中学部・中学校用になっている。こちらについても評価はいずれかの欄に◎あるいは○が記載されているという状況である。

今年度の調査研究委員会では、教科書図書として適さないというような意見があっ

た図書はなかった。

それぞれの図書については、この後の閲覧時間に手に取ってごらんいただき、内容等をご確認いただきたい。

教 育 長 今説明があったように、確認の意味でこれから後ろにある一般図書と文部科学省著作教科書の閲覧の時間をとりたいと思う。

(図書閲覧 午後5時55分～午後6時06分)

それでは、協議を再開する。

図書をご覧になっていただき、また先ほどの事務局の説明を含めて、皆様方からご意見やご質問等はないか。

(質疑なし)

特に不適切であるというご意見も皆様方からないので、別紙資料1の報告あるいは別紙2の学校教育法附属第9条の規定により教科用図書及び文部科学省著作教科書(小学部用・中学部用)一覧にある図書を全て採択するという方向でよろしいか。

(異議なし)

ご異議がないようなので、ただいまの説明も含め、採択理由として事務局に整理していただき、26日に最終的に決定したいと思う。

#### 【小学校 理科】

教 育 長 本日の3件は終了し、前回継続審議となった理科について協議を行いたいと思う。事務局から改めて何かご説明はあるか。

指 導 課 長 特になし。

教 育 長 それでは、私のほうから経過等を含めご説明したいと思う。

前回、7月18日の協議では、理科の全6者の発行本について委員の皆様からご意見等をいただき、協議の結果、D者とE者の2者に絞り込みを行ったが、両者を推薦する意見がきつ抗し、議論を重ねたが、採択候補の決定に至らず、本日改めてこの2者について協議するという取り扱いとした。

前回の臨時教育委員会終了後、各委員から継続審議の方法についてご意見が出され、次のような方向性を確認したところである。再協議では、両者に共通する三つの具体的単元の内容を改めて分析することとした。まず、1・2年生の生活科との接続、理科のスタート学年となる3年生の最初に行う「生き物」についての単元。それから、現場の声をお聞きすると理科の学習で比較的つまづきが多く見られる5年生の「植物の発芽と成長」と「ふりこのきまり」、この二つの単元を合わせ、3つの単元を比較・検討して、両者の違いを見てはどうかという意見だった。

そこで、本日はD者、E者両者に対するこの三つの単元について各委員の意見と併せて、改めて推薦する発行者をご発言いただきたいと思う。その他の特長がある場合には、付け加えてご発言をお願いしたい。このような流れで、本日検討を進めていきたいと思う。

それでは、加藤委員から分析結果、あるいはご自身の推薦する方を最終的にご発言願う。

加 藤 委 員 いろいろ検討した。科学的思考というのをどのように伝えていくかということだが、

そしてそれが小学校段階であるというときに、それをどう考えるかということであるが、まずE者のほうは、予想を立て、検証をしていくというその思考のスタイルが非常に徹底している。そして、結果も与えるのではなく自分で出していった、その結果について考えていこうという、かなり上級の印象がある。それをどう捉えるかということである。

D者については、実験のところ自分のやった結果を書き込むようになっていて、ページをめくると結果というのはこうなるというのが与えられていくような形になっている。ここをどう考えるのかという部分である。

それで、小学校の段階で、例えばいろいろな実験器具、用具の使い方、観察についてもいろいろな条件を統制していくにしても、それ以外の条件のぶれ、素材のばらつき、手続きの未熟さ、そういったことを考えていくと、自分の結果がきれいに出ることはほぼ難しいと思う。形を真似する、形から入る、そしてやってみる、体験するということが大きな目標なのかなと思う。予想どおりの結果を出すことよりも、まずはそれをやってみるというところに力点があるのかなと思った。したがって、考え方の手順、実験手続き、用具の使用法、まとめ方などをパターンに繰り返し教えていることを主目的としたD者がいいと思っている。

このことは、授業の中で児童の注意を同じ部分に向けて、進行を揃え、教室全体をコントロールするということのまだ難しい段階にあって、例えばページを開きなさい、何行目を見なさい、表の何とかを見なさい、ここここはどうなっているかということが、言語刺激だけで一斉に揃うということがなかなか難しく、やはり一つ一つ提示をして、そのページを開いたか、開かないか、どこを見ているか、そういったことまで先生が児童の注意をまとめ上げていかなければならないとき、できるだけ教科書はシンプルであってほしいと思うところである。クラスの中に、特別の支援ニーズがある子どもたちも加わる。できるだけ環境刺激を統制すること、ターゲット刺激に注意を集めること、これが重要ではないかと思う。教科書の視覚刺激も同様で、シンプルのほうが必要なトピックに目を向けてもらうことには有効である。また、児童の学力には幅がある。多くの補助的な情報はたくさんE者のほうが網羅されていると思った。この提供ということが、例えば初めから動機の高い子どもたちであれば、どんどん展開していくと思う。しかし、発達がゆっくりであったり、ばらついていたり、勉強が不得意な、または動機の低い子どもたちも含め、全体的に動機を引き上げていくということが小学校の理科の中では非常に重要だと思い、D者になる。

教 育 長 中村委員、いかがか。

中 村 委 員 私も前回D者を推薦したが、見比べてみて、やはりD者のほうがいいと思った。どちらの教科書も遜色ない、いい教科書なのだが、E者のほうは本当に情報量がすごくたくさんある、D者は一言で言えばシンプルだと思う。シンプルだからこそ、今加藤委員もおっしゃったが、今何をやっているのか、どこを考えなければいけないのか、そして、発問自体もたくさんではない、補助的な情報がない分、先生が授業を組み立てやすい。たぶんD者はそこが基本になっているのかなと私は思った。いろいろな情報がない分、子どもたちとのコミュニケーションをとって、そして情報を拾い上げて、授業をつくっていくというような感じがとてもしている。例えば3年生などは、2年生の生活科から上がってきて、観察をするというときに、色はどうか、形はどうかというよりは、例えばにおいをかいでみるとか、よく見てみるとか、触ってみる、耳



をすましてみるというような自分の五感をフル活用して言葉を、そして考えを引き出してやるというようなことができるのはD者なのかなと思った。

ただ、E者のほうも子どもたちの考えが順を追って既を書いてあったりとか、先生の発言も書いてあったりとかして、順を追って読んでいくととても分かりやすい形にはなっていると思う。D者のほうにはそれはないが、そういったことも含めて授業をつくっていく、先生と子どもたちでつくっていくというようなことができるのはD者なのかなと思う。そのためには、実験も流れがとてもシンプルで分かりやすいというようなところがいいのかなと思った。

教 育 長 里村委員、いかがか。

里 村 委 員 私は前回、このお二方と一緒にD者だったが、与えられたルールに従って比較・検討して、E者のほうが良いというふうに考えを変えた。単元を三つ比較してみて、改めて分かったことなのだが、授業を進めていく上でのガイダンスがE者のほうが優れているかなということが1点である。それから、やはり教科書を採択するに当たり、平均的な先生の、言葉は難しいが授業をする力を考慮するのではなく、特に理科については最良の教科書を選ぶと、こういう視点で選ぶというように、その考え方を優先した。

それから、少し詳しく申し上げたいと思うが、D者の教科書は非常に、シンプルという言葉もあったが、まとまっている教科書であることは事実だと思うし、私は前回そのところを推薦したかった大きな理由なのだが、理科の真髓の教育となると、E者の方がかなり優れているという理解で教科書を選ぼうと思った。

具体的に比較したところを述べると、3年生の入り口のところは大きな差はない。ただ、よく見ると観察した昆虫とか植物の記載例が全く違う。大きく、よく見て書くようにE者の方はなっている。黒板に貼り出した紙の形になっているが、やっぱり違う。

それから、ガイダンスと申し上げたが、「問題をつかむ」「調べる」「まとめる」、D者も同じように、「見つける」「調べる」「振り返る」と3段階になっている。そういう意味では考え方にある程度道筋が両者ともあるが、児童にとって分かりやすいのはやはりE者だと思った。

それから、5年生の最初の方の「植物の発芽と成長」、ここは最初のファーストクエスチョンで、E者は「種子はどうして、ふくろの中では芽を出さないのかな」で始まる。これにはどきりとした。確かに、お店で売っている植物の種は、袋に入っていたら発芽しない。それはどうしてかということ。要するに水がないからとかそういう着想をする質問である。

それから、実験をした結果が1枚めくった左側に両者とも出ているが、この比較だけについて言うと、数字がもう既にD者は載っている。これは子どものことだから、大体出るべき数字というのを、忖度して実験に入るわけである。それは何も書いていないE者のほうが優れていると思う。実験した後に数字がまとまらなくても、理科の実験だからそれはそれでいい。だから、ある程度出るべき答えを書いて誘導するよりは、白紙のほうが良いと思った。

それから、授業の流れ。これは繰り返しになるが、ここは両者ともなかなかよくできている。特にD者は最後のところで「フムロウはかせの資料室」がしっかり書かれており、そこは良いところだとは思いますが、観察や実験の手順とか器具を選ぶところま

で考えさせるようになっているので、やっぱり理科という観点からではE者に一日の長があるかなということである。

それから、非常に小さなことだが感激したことがある。両者とも日光に当てないで黄色くなった植物の写真が出ているが、E者のほうは、その後光に当てて緑になっている絵が出ている。ここがすばらしい。編集委員の方のよりよい教科書をつくろうという心意気を感じた。

それから「ふりこのきまり」のところである。最初のページはD者のほうがいい。ブランコが書いてあったり、ガリレオが教会のランプを観察しており、E者に比べてここはD者のほうがいいが、単元の最後でガリレオ・ガリレイを紹介しており、しっかりと理科的に説明があるということでE者が優れていると思う。

細くなつたが、導入部でD者は「おもりを重くすると勢いがついて、1往復する時間は短くなると思うな」とわざと間違った言葉をキャラクターに言わせている。それはなかなか知恵があることだと思う。ただ、次のところでD者は「ふりが1往復する時間は、何度かの測定結果を平均して求める」というように直接指示している、それに対してE者は、「ふりこの1往復する時間を正確にはかるのはむずかしいので、実験では、ふりこの10往復する時間をはかる。」というように促している。このところも、E者が優れていると思った。

こういうふうに細かく説明していくと、理科という観点からE者のほうが上かなと思った。

教 育 長 吉田委員、いかがか。

吉 田 委 員 3点比較ではないが、3年生1単元、5年生2単元で見せていただいたときに、やっぱりそれぞれに良さもあり、もう少しあればいいかなというような課題的なものもだんだん見えてきたなと思う。大きく見たときに、やはり3年生の生物教材の比較においてはE者の方がやや「生活科」の発展を意識した編集をしているなと思う。例えば、先ほど中村委員から五感で感じるということがあった。大変大切なことだが、むしろ「生活科」で五感で感じて、3年生の理科になってもう少しそこに理論性を持ってくる、科学性を持ってくる。「生活科」のところに付録の扱いだったが比較の仕方「並べる」とか「比べる」とかというような言葉で子どもたちに投げ掛けている。それが具体的に3年生の題材の中では形、色という分類の仕方、これは里村委員も言ったが観察のカードを黒板に貼った例に具体的に示されているが、「生活科」から理科への発展という意識の変換ということではE者がよかったかなという印象を受けている。

次に5年生に移った場合、「植物の発芽と成長」だが、これは大きく見るとどちらとも言えないかなという印象を受けた。それぞれに良さもあり、課題もある。例えば、本当に具体的なことになるが、D者は液体肥料の作り方でやっている。それがE者には見られなかった。それからE者は実験の計画を立てるところにかなりのスペースを割いて働き掛けている、ところがD者にはその部分が少なかった。それぞれ一長一短があるように感じられた。

次の単元、「ふりこのきまり」では、こちらはどちらかということ私はD者が良かったという感じがしている。特に里村委員が指摘したことが、それがどっちがいいのかちよつと分からないが、いわゆる教師の介在の仕方でも違ってくると思うが、いわゆる「÷10」がなぜ必要なのかということが大きくそれぞれの実験表に明示されている、

それがD者である。E者はまとめて、あるところで10回打って割ればいいというようなことをやっているが、D者の場合はそれぞれの3つの実験のところに表として出ている。それで「なぜなんだろう」と子どもたちに問いを投げ掛けているところがあり、ある意味それが親切なのかなという印象を受けた。

それから、D者は必ず算数に戻しましょうということで、「算数のまど」を巻末に設けている、という関連性の良さ。さらには、前の授業の発芽のところの実験を想起させるような働き掛けというD者の良さが出ている。もちろんE者の良さもある。

総じて、1勝1負1引き分け的な内容だが、私が特に惹かれたのは、3学年における、これは前にも言ったが、子どもたちにこの単元だけではなくて問題の把握の仕方を繰り返し繰り返しやっている。それから、5学年では問題を把握したらそれをどのようにして解決したらいいのかという計画の立て方を繰り返し繰り返しやっている。これこそが科学的思考を育成することに直接結び付くのかなと考える次第である。したがって、また前回と同じになってしまうが、E者を推薦する。

教 育 長 花輪委員、いかがか。

花 輪 委 員 結論としてE者が優れていると判断した。三つの単元を比べたが、まず抽象的に言わせてもらう。単元への入り方は断然E者が優れていると思う。先ほど里村委員が、発芽のところ「種子はどうしてふくろの中では芽を出さないのかな。」、あれも私は唸った。それから、最後の「ふりこのきまり」のところでも、ガリレオ・ガリレイが見付けたから考えましょうというのがD者だが、E者はまず曲に合わせてテンポを変えるのだから、ふりこのふれ方を変えてごらんという内容から入っている、いわゆるキャッチする、興味を喚起するという意味では、E者のほうが優れていると思う。

それから、途中のロジカルな思考、理科的思考、科学的思考のさせ方だが、これもE者のほうがきちんといろんなところに配慮して進めている。例えば今まで出てきたところで言うと、ふりこのところでは10往復させて3回やって平均する、これは両者同じだが、E者はどうしようという疑問があって、それならば算数で我々、平均を学んだんじゃない？というふうに導くのである。それはD者は全くなくて、10回往復して3回やりなさいというふうに天下りになってしまっているというところが非常に私は気になる。それから、里村委員も言った、黄色くなった後もう一回光に当てる、これは葉緑素があって光合成をするとまた緑になるよ、それから光を当てないときと栄養をやらないときの育て方は違うよねということも考えさせている。これも非常にいいところだと思う。

それから、E者はほかの単元とのつながりをよく意識している。例えば5年生の発芽のところの副題は「生命のつながりを考えよう - 1」である。次の「魚のたんじょう」は「生命のつながりを考えよう - 2」である。132ページには、そういう生き物の学びをつなごうという欄で、生き物の生命のつながりを概観しているということがある。先ほど言った、理科だけれども「算数」のところ学んだものを応用しようよという提案もしている。そういうことをもろもろ配慮しているということで、私はE者は今回、優れた理科の教科書を提案していただいたのではないかなと思う。

それから、全体的な見た目はD者のほうがデザイン等々優れているというのは確かだと思う。やはり理科というのは一人の先生がやるには大変な教科だということもそのとおりであり、仙台市としてはできるだけ、提案されている実験などを実施できるような人員配置、いわゆる理科の実験の補助の先生の配置等にも配慮し、ぜひ理科的

思考をますます発展させるようお願いしたい。

教 育 長 阿子島委員、いかがか。

阿子島委員 私も全体を見てきて、E者のほうを推薦したいと思う。理科は学習したことが日常生活でどのように生かされていくのか、どのようにつながっていくのかが結び付かないと、なかなか理解しにくく、「理科離れ」になっていってしまうと思う。小学校で習った基礎が中学校でさらに発展して、日常生活へとつながっていくことを理解してもらわないと、なかなか学習していくのは難しいのではないかと考えている。児童が楽しみながら理科を探究していくことが本来の学習の姿ではないかと思っ  
ているので、教科書はもちろん、実際に観察して、先ほど花輪委員がおっしゃったが実験をする、子どもたちが理科に親しみを持って学習していくのにはこれが一番いいのではないかと感じている。そして、学習の入り口となる理科の教科書は、やはりとても重要だと思う。

そこで、まずD者について申し上げる。D者は、内容がとても端的で見やすく、分かりやすいので、児童も理解がしやすいのではないかと思う。また、先生方も授業を進めていく上ではとても使いやすいのではないかと感じた。

一方、E者は授業で理解した後に発展的に理科学習を進めていく情報が豊富で、また「学んだことを使おう」で「暮らし」とか「社会」というように、その下にコメントも載っていて、自分でちょっと疑問に思ったことをまた一步先に進めていけるようになっている。また、「理科のミカタ」というところもあり、子どもたちがどこに興味・関心を持つか分からないので、いろいろ授業を進めていく中で「今回この実験はおもしろかったけれど、こういうことはほかでも行えるのではないのか」とか、子どもたちの気付きや、そういうところへの観点にも進めていけることを考えると、やはり情報量の多いE者のほうがいいのではないかと考え、そちらを推薦したい。

教 育 長 委員の皆さんから意見を出していただいたところだが、何か追加するご発言があればお願いしたいと思う。何か追加的な発言はないか。

(意見なし)

特にないようなので、若干まとめ的な話を進めていきたい。事務局からもお話を伺いながらと思っている。

D者とE者、2者について改めて協議をいただいたところであるが、前回からの流れを改めて申し上げると、理科については6者から選定する形で絞り込みを行う際、このD者とE者の2者が優れているということで、議論をしているところであり、委員の皆さんからいただいた意見をお聞きすると、両者ともに高いレベル感にあるという点では意見が一致していると受け止めている。

その上で、これからどう進めていくかということであるが、皆さんの意見を聞いて、見本本の内容もさることながら、仙台市の児童の現状、学力検査等で出ている状況も確認しながら、さらに進めていきたいと思う。事務局から、標準学力検査で理科の検査も行っているので、その課題等についてお話しさせていただきたいと思う。学びの連携推進室長からお話しさせていただく。

学びの連携推進室長 仙台市標準学力検査の小学校理科の状況について、お話しさせていただく。

これまで過去3年間の結果を分析した結果だが、やはり子どもたちが外遊び、それから自然との触れ合い、体験、そういったところが少し不足しているのではないかと  
思われる回答が多くあった。それから、例えば「電気」とあるとか、「月と太陽」と

というような日常生活の中にある事象、これが理科の学習と結びつきづらいところがあるという点が見て取れる。継続課題として過去3年間、特に落ち込んでいるところが小学校5年生の「電気の働き」、例えば「電気の流れのことを何と言うか」であるが、本当は「回路」という言葉だが、このことが子どもたちの中では結び付かない。知識がきちんと定着していないというところが見て取れる。小学校6年生で言うと「顕微鏡の使い方」で、例えば顕微鏡の台の上に載せるカバーガラス、スライドガラスの上に載せるカバーガラスという言葉も、なかなか定着していないというところもある。あとは具体的な使い方の順序に係る理解等についても難しい結果が出ている。それから、過去3年間のうちの2年間だが、小学校4年生で言うと「昆虫の育ち方」、「太陽と地面の様子」、「電気の通り道」、5年生の「ものの温まり方」というところで、日常生活と関連性の高い単元、領域のところで課題があることが見て取れるというところである。

教 育 長 ただいま仙台市の児童、小学生における理科の課題についてお話しいただいたが、この点について皆さんからご質問はあるか。

(質疑なし)

拮抗している状況の中で最終的に1者に絞り込みを行わなければいけないが、皆さんの合意形成のもとで進めたいと考えている。このまま意見を述べ合ってもなかなか打開というのが難しいと思われるので、私からも少し意見を述べさせていただき、これからの議論の参考というか、判断の一助にさせていただければと思う。

そういったところで、私からの意見を申し上げてよろしいか。

(異議なし)

私もこの三つの単元について分析を行った。私の感想も、委員の皆さんからいただいた意見とほぼ同じ趣旨になった。

D者については、内容項目が精選され、シンプルで分かりやすく、教師の力量によるが、工夫次第で授業の幅に広がりを持たせることができるのではないかととらえた。多くを詰め込み過ぎず、児童の活動あるいは問題解決学習といった点に取り組みがしやすい。

一方、E者については、基礎的な知識・技能の確実な習得、応用、発展的な学習へのつながりが明確に示されていると感じた。情報量も豊富であり、そういう意味からすると親切・丁寧なつくりの教科書であると思う。

両者の良さというのは、ある意味教科書のつくり方のコンセプトの違いかと考える。どっちが悪いとかどっちがいいとか、一括で決めるのもこれはまた難しいと感じた。そうしたことから、私としては先ほど事務局から説明があった、仙台市の子どもたちにとってどういう理科の教科書が望ましいのかという点も一つ大切な視点であるととらえた。先ほどお話があった学力の課題としては児童の経験、実生活の事象と理科との結びつきというのが少し弱いという点、あるいは実験、観察の手順なり、その取組ということが課題と認識したところである。こうしたことから、平易に手順もしっかりしている教科書ということ逆を逆に考えていきたいと思う。

もう一点、先ほど委員の方からもお話があった「理科離れ」という問題がある。これは仙台市の児童にとってそうならないように、しっかりと理科に興味・関心を持たせるという取組も必要なのではないかということを考えている。

一方、小学校の学校現場を見ると、小学校においてはクラス担任制ということで、

全ての教員が理科の授業を受け持ちするということが前提になる。加えて、本市では教員の世代交代が急激に進んでおり、経験年数の浅い、あるいは年齢的に若い先生が増えている。そういった中で、理科の授業をしっかりとつなげるためには、ある程度具体的な、細かな教科書ということも必要ではないかと考えている。

そういった視点から、いずれの教科書にも良さはあるものの、私として総合的に判断すると、E者のほうが仙台市の教科書としてより適切ではないかと考えているところである。

以上私の意見を述べさせていただいたが、このことについて皆様からまた何かお気付きの点とかがあればお願いしたいと思う。

D者を推された委員の方、いかがか。

中 村 委 員 絶対にD者がというものではない。ただ、自分としてはこういう形で、今教育長もおっしゃったがやはり先生方の負担とかそういうこともあるが、できればここを負担と思わないでほしいなと思いつつ、そうは言ってもというところもあると思うので、皆様のご意見を聞いて、E者でも構わないと思う。

教 育 長 先ほど私が述べたように、D者もE者もそれぞれ特長があり、そして優れている教科書だということは言えよう。その上で今改めて皆さん方からご意見をいただいたところで、E者を推薦していただいた委員の皆さん、E者ということでもよろしいか。

里 村 委 員 E者に決めるに当たって、皆さんの意見を伺いたい。今教育長からもお話があったが、いい教科書を選ぶだけではゴールではない。いい教科書を選んだときに、それをしっかりと使いこなせる先生方をどう育てていくかということが必要だと思う。だから、事務局の皆さんにもお願いだが、いい教科書を選んだことを出発点にしてほしいと思う。この教科書は私の理解では来年の4月から使われるわけだから、それに向けて、例えば実験の在り方について、各学校あまりばらつきのないようにとか、先ほど課題を説明いただいたが、子どもたちにももう少し自然と接するような機会を作っていくとか、むしろそのことが大事だということである。これで終わりにしないでほしいということである。経営的な観点からお話しさせてもらおうと、例えば3カ月か4カ月掛けて皆さんで検討していただいて、理科の先生の質の増強についてこういうことをやる、あるいは途中で理科の先生方に次の教科書を見ながらこういう点をよく念頭に置いて教えてほしいとか、研修になると思うが、その具体的な方法を私たちに説明してほしい。要するにこれから先生方に向かってどういう支援をしていくかについて、全体の仕組みを説明してほしい。そうでないと、内容の濃い教科書を選んだことがマイナスになりかねない。それから、子どもたちもあの教科書を読んで少し負担に感じる可能性もあろうと思われる。だから、その負担感を取り除いて、「理科離れ」を止めていくためには、やっぱり先生方の力が必要なので、そのことをどのように考えて、どのようにやろうとしているのか。実は教科書選びそこがポイントである。毎年変えるわけではないので、何年かに一遍の教科書を見直すということ、どう学校の教育を充実させるという意味で行っていくかということだろうと思う。その点について皆さんの意見も聞きたいし、「分かった、やる」と言うのであればそのように宣言していただきたいと思うのである。

教育人事部長 今のお話について、私どもの取組について申し上げたいと思う。

理科の実験については、あまり得手でない教員も当然いるので、そこを充実させるために、科学館に指導主事を置いたり、各小学校には理科支援員とって理科の授業

を支援する補助的な役割の人員を配置したりしている。

今回、新たに教科書が採択されるということで、実験そのものが変わるわけではなく、具体の教科書の内容に沿い、研修をこの間で充実させ、教育の質が高まっていくよう取り組んで参りたいと考えている。

里 村 委 員 力強いお話だった。これから取り入れる教科書のレベルをかみくだいて、教育研修にプラスアルファを乗せないと、新しい教科書についていけないと考えている。ぜひいろいろ皆さんと意見を出しながら、今度の新しい教科書の観点から行くと必ずしも十分ではないという仮説を立ててやっていただきたいと思う。

教育 人 事 部 長 今、理科の指導主事も聞いているので、その点をよく肝に銘じて具体的にいろいろ検討して取り組んで参りたい。

教 育 長 ほかに、2日間にわたってご議論いただいたので、理科教育について何か言っておきたいことがあれば、ぜひご意見をいただきたいと思う。

それから、新しい教科書のもと、来年の4月からしっかりとスタートさせるためには、この6か月間の取組も大事であるので、機会を捉え、委員の皆さんにその取組の状況をご報告することも考えていかないといけないと思う。

花 輪 委 員 一言だけ。理科とか科学とかで一番大切なのは、論理的に思考を発展させていくロジカルシンキングだと思う。それを意図的にやるというので、ドイツ語で「Gedankenexperiment」というのがあるが、思考実験である。頭の中である場面を想定して、自由に動かして、結論はどういうことになっていくのかというのが理科とか科学では非常に大事になってくる。これは生きていく上でいろんなことにも応用できる最も基本的な思考の態度だと思う。それを醸成する一つが理科であると思う。そこをきちんと訓練する、何回も何回も訓練するというのが大事なのだと思う。理科の発想、理科的思考というのは、理科に限らずいろいろなところで応用がなされていくものだから、ぜひそういうところを伸ばすような形で理科の授業を組み立てていただきたい。そのためのいろいろな施策も打ってほしいと思う。

教 育 長 事務局で、花輪委員からのご意見も十分踏まえた対応をお願いする。

吉 田 委 員 今の機運に水を差すようなことを言うてしまうかなと思うが、本当に理科は大切だと、そして標準学力検査でも目標に到達していないということで、議論が集中しているが、先ほどまでは道德の議論だった。その前は保健だった。こういった現実がある。例えば理科の実験が大切、顕微鏡の使い方ができない、ではしっかりやろうというときに、その準備、後片付けは、10分ずつしかない。ほかの教科も大事である。だから、理科を大切にすれば、ほかの教科も大切にしなければならない。マクロ的に物事を見ていかなければならないといったときに、小学校教育の在り方全体からものを見ていかなければならないと思う。働き方改革と言っているが、やはりいまだに捨象していかなければならないところ、いわゆる精選、そして重点化、そのバランスを考えていかないと、虻蜂取らずになってしまうという懸念を持っている。理科を大切にする限りは、学校生活全体、指導の在り方も全体を見ながら考えていくことをやはり心掛けていかなければならないと感じる。

里 村 委 員 全体をよくするときにはバランスをとってやると、全体がよくなるのである。私も今日最後に言いたかった、保健もちゃんとやってくれと。それから家庭もやってほしい。そういう意味では、吉田委員の意見には賛成なのだが、理科だけと言っているわけではない。つまり、新しい教科書を4年に一遍、選ぶということで終わりにしな

いということを我々もう一度覚悟するということである。それで、どこの教科、全体を上げると言わずに、やっぱり重点策と忘れてはいけない科目と分けることも大事だと思うし、私は理科だけではなくて、今回ずっと教科書選びをしていて、最近議論したのは保健と家庭では、内容がしっかりしたほうの教科書を選んだ。だから全般的にやはり新しい教科書を選んだときにどのように先生方に指導、支援をしていくかということをしわなければいけない。そして、その中であえて言うと理科は重点科目ではないかということで申し上げている。それはなぜかと言うと、これは大きな話になるが、理科離れが日本全体で進んでいる実情がある。理科の先生のなり手も少ない。ということは、20年後、30年後の日本の世界における立ち位置が心配になるのである。そういうこともあって、仙台の理科は一つ違うぞと言われるぐらいになってほしいというのが私の気持ちである。だから、そういう意味で最初はD者がいいのではないかなと思いつつ、1週間の時間でE者に変えたのである。特に反論しているということではないが、思いは一緒だと思うが、ほかの科目も同じように検討してほしいと思う。

吉 田 委 員 員 それこそ考え方は変わらない。教科書選びで終わったわけではなく、ここからスタートである。そうしたときに、大きく物事を見て、ここを大事にしていかなければだめだということでものを申し上げたということである。

教 育 長 理科についてさまざまご意見いただいたところであり、先ほど私から確認したように、理科の採択候補はE者ということで、その理由等については事務局に整理していただき、定例教育委員会の場で最終的に決定して参りたいと思う。

それでは、以上で令和2年度使用の仙台市立義務教育小学校教科用図書、保健、道徳、一般図書、理科の採択についての協議を終了する。

4 閉 会